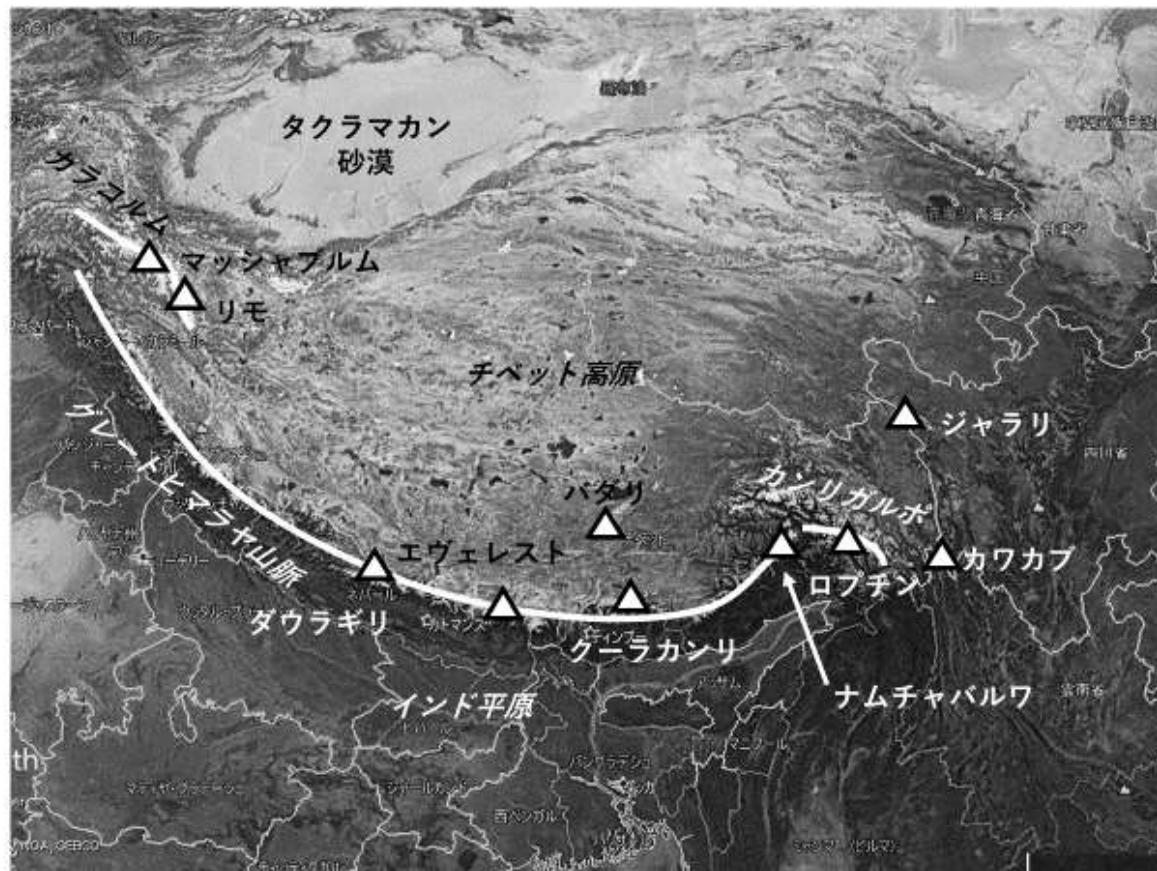


解 説 書

絵画が生まれた背景

中央アジア 関連山峰位置図



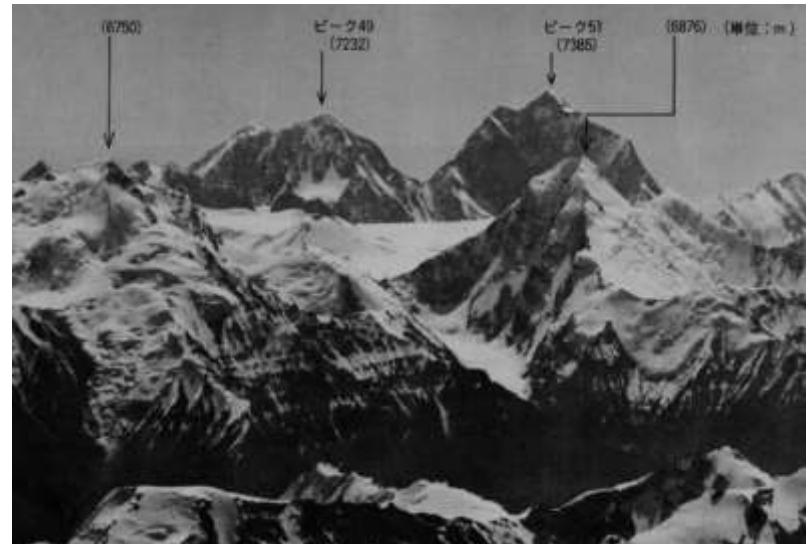
カラコルム

パキスタンのカシミール地方にあるカラコルム山脈に行ったのは 1981 年なので 40 年も前になる。何しろ初めての海外、初めてのイスラム社会、初めてのヒマラヤ見参だったので見るもの聞くものすべてに驚きの旅であった。カラコルムに行くことになったのは、神戸大学山岳部の同期生で一番親しかった友人、右田卓君が 1980 年 8 月 6 日、東部カラコルムのロロフォンド氷河でクレバス（氷の裂け目）に転落し、25 歳の若さで遭難死したことによる。

遭難の 4 年前、神戸大学山岳会（山岳部 OB 会）はカラコルムの未踏峰シェルピカンリ（7380m）に初登頂した。当時大学 3 年生であった私たちは血氣盛んな年ごろである。シェルピカンリの先輩たちの成功を見て「次は我々が！」と気勢を上げて、目標とする未踏峰を探した。そして非常に魅力的な山を見つけた。東カラコルムにあるリモ峰（7385m）である。それはシェルピカンリの頂上から望遠レンズで撮られた写真に写っていたのである。ただ、その山はパキスタンとインドの領土紛争地域にあり、しかも麓に行くには 5 千 m の峠ビラフォンド・ラ（「ラ」は峠の意）を越えて長大な氷河の無人境を 1 か月も歩かないと辿り着けないという途方もない場所にあった。そこでアプローチを探るために偵察隊を送ることになり、右田君ともう一人の同期の中川勝八郎君の二人が行けるところまで偵察することとなった。その偵察行の途中、ビラフォンド・ラを越えたところで事故が起こった。右田君がクレバスの上にうっすらと雪が積もったヒドンクレバスを踏み抜いたのである。ヒドンクレバスとは雪でカモフラージュされた落とし穴のようなものである。そのクレバスに 13m も落下しそのまま亡くなってしまった。その時には遺体を雪上に引き上げることができなかったため、クレバスの中に残され

たままとなってしまった。

翌年、遺体の回収とご遺族（ご両親と姉上）の現地訪問を行うために神戸大学山岳会は追悼隊を派遣した。この隊にご遺族付き添い役として私が参加することとなった。



シェルピカンリからのリモ峰（ピーク 51）

パキスタンの首都イスラマバードに到着した直後に日本とはあまりにもかけ離れた世界に来てしまったという衝撃を受けた。国の玄関である国際空港の出口を出たとたんに乞食の集団に取り囲まれてしまった。施しを求める人々をかき分けながらタクシーに乗る。街中は車やバイクの騒音に満ち、香辛料と排気ガスの入り混じったにおいが鋭く鼻を突いた。7 月下旬だったので、気温は 40 度を超えており、しかもイスラム教のラマダン（断食）の月にあたっていた。太陽が出ている間は食べ物、水など一切口にしてはなら

ない。日没が近づくと街のそこら中で屋台のようなものが出て、香辛料のにおいをぶんぶんさせながら何やら調理が始まり、目が血走った人々が回りに集り始める。日没と同時に彼らは屋台に群がり、そして夜を徹して騒々しい食事が続くのである。文化の違いとは言え、何もかも驚きに満ちていた。ただ、外国人で仏教徒でもある我々は昼間もホテルで普通に食事をし、イスラムでは御法度のアルコールも特別許可をもらって手に入れることはできた。



喧噪と混沌のイスラマバードを離れてカシミールの奥地に行くにつれて、さらに強烈な衝撃を受けることになった。カシミールのギルギットの街まではインダス河に沿って付けられた「カラコルムハイウェイ」をマイクロバスで辿った。ハイウェイとはよく言ったもので、インダスが削り取った断崖絶壁にうねうねと付けられた砂利道で、車がやっとすれ違いができるほどの幅しかない。茶色く濁った激流を数百m下に見下ろす崖っぷちの道をバスはかなりのスピードで走るので緊張の連続だった。やがて、インダス河が巨大な

ナンガパルバット山(8126m)の西から北へと回り込むように屈曲すると、山々から緑が消え、砂塵が舞う褐色の荒々しい岩だらけの世界になっていく。極端に乾燥しているのだ。私はその後もチベットやネパールを訪れたが、それらと比較してもカラコルムが最も荒れ果てた地であるという印象がある。温暖・湿潤で緑豊かな日本に住む者にとっては対極にあるカラコルムは世界の果てを感じるのである。カラコルムハイウェイはギルギットからフンザ河に沿ってさらに伸びて中国領新疆ウイグル自治区のカシュガルまで続いている。こんな荒れ果てたところを通って、その昔よりインドと中国の人や物、文化が往来したのである。

我々はギルギットでカラコルムハイウェイを離れ、さらにインダス本流に沿った峡谷を遡る。それまでにも増してスリル満点な、かろうじて道路と呼べるようなところを通過すると、狭い峡谷がようやく広く開け、緑が豊かなオアシス、スカルドに到着した。スカルドはK2やチョゴリザなどへ行くバルトロ氷河への出発地であり憧れの地である。スカルドには滑走路があり当初はイスラマバードから空路ここまで飛ぶ予定だったが、天候が悪く飛行機が飛ばない日が続いていたので陸路カラコルムハイウェイ経由としたのである。飛行機で来るよりもはるばると遠い地に来たという感覚が一層強く感じられた。しかしここまだ我々の目的地ではない。

スカルドからジープに乗り換えてインダス河、そして支流のショーク河に沿ってさらに上流へ向かい、ジープが入ることができる最上流のオアシス集落であるウルセまで行った。ウルセはショーク河とサルトロ河の合流点にあたり、ビラフォンド・ラはサルトロ河の最源流の峰である。ウルセまで来た我々は、そこから徒歩で背後の丘陵に登り、サルトロ河上流を望むことができるダンダ・ラにご遺族を案内した。ここまで日本を出てから2週間以上経っていた。遭難現場へはサルトロ河をさらに上流に10日ほど歩き、標高5

千mの雪のビラフォンド・ラを越えた先である。とてもご遺族の行ける場所ではないため、せめてここから終焉の地の空を見てもらおうとやって来たのである。ついに還ってこなかった息子・弟を思って上流を見やるご遺族の姿は、登山を志す私に遭難の深刻さを心に刻みつけ、終生忘れることができないものとなった。



ダンダ・ラからの帰り、ショーク河とサルトロ河の合流点に近いスルモオアシスの背後の河岸段丘に登った。一面のそば畑が広がり、振り向くとフーシエ谷の奥にカラコルムの巨峰マッシャブルム (7821m) の神々しい姿が望めた。初めてヒマラヤの高峰を間近に見た瞬間である。そのときの光景を基に描いたのが *pic. 1 「ショーク河畔にて」* である。昼間は無味乾燥な褐色の大地が、黄昏時には夕日に照らされてオレンジの色彩に染まる一瞬である。画面上サルトロ河は中央の小高い丘陵とその背後のオレンジ色の斜面の間を右側から流れてきて、丘陵を回り込むようにしてフーシエ谷を合わせて

奥から手前に流れている。画面の手前右側からはショーク河が合流している。丘陵の裾にある樹木の茂るオアシスがウルセ、丘陵の右側の鞍部がダンダ・ラである。日本を遠く離れて僻遠の地で見た忘れることができない景色である。



右田卓君とロロフォンド氷河

クーラカンシリ

カラコルムのリモ遠征の夢はロロフォンド氷河の遭難によって叶わぬ夢となりつつあった。遭難に加えてカシミール地方の情勢もきな臭くなっていた。1979年、隣接するアフガニスタンへソ連軍が侵攻した。インドとパキスタンのカシミールをめぐる軍事衝突も激しくなっていた。リモはその当時の印パ軍事境界線のすぐ近くのパキスタン側にあった。境界線を挟んで印パ両軍が衝突しあう前線である。戦況によって、今はパキスタン領でもいつインド領になるかもしれないという不安定さがあった。事実、後年（1988年）日本・インド合同隊によってリモが初登頂されたときには、軍事境界線が西に移動し、インド領内の山としてインド側からアプローチされ、我々が考えたパキスタン側の長い峠越えのアプローチではなかった。

このような当時の状況からリモに固執していくもいつパキスタン政府から登山許可が出るかわからず、神戸大学山岳会のカラコルム遠征計画は暗礁に乗り上げてしまった。私自身も1983年に結婚し、翌年長男が生まれていた。ヒマラヤへの夢はだんだんと遠のき始めたかのように思われた。ところが、1984年の暮れになって思わぬ山が現実的になった。中国領チベットにあるクーラカンシリの登山許可が神戸大学にもたらされたのである。中国では毛沢東が亡くなり、全土に吹き荒れた文化大革命が終結したのが1976年である。国政を引き継いだ鄧小平の改革開放政策により、チベットの未踏の山々が外国の登山隊に徐々に開放されてきていた。そのチベットにおいて未踏で特に大物と目されていたのが、ナムチャバルワ（7782m；pic.14 参照）とクーラカンシリ（7554m）である。当時世界の未踏峰のなかで第1位と第2位の高さを誇る二つの名峰である。この二つの山には世界中の登山隊から登山許可の申請が出されていた。ヒマラヤの山に登山するためには一般にその国が

発する登山許可を得る必要がある。一つの山の登山許可是通常1シーズンに1隊とされていた。ヒマラヤ登山のシーズンは一般に春季のプレモンスーンと秋季のポストモンスーンの年2回ある。夏季はモンスーンと呼ばれるインド洋から吹き上がる季節風のため天候が悪く登山には適さない。

神戸大学の平井一正教授（1976年のシェルピカンシリ遠征隊隊長）は早くからチベットに目を向けて、登山許可を取得するために中国政府の窓口である中国登山協会と交流を重ねていた。そのために独力で中国語を学ばれ、次第に史占春登山協会首席と親密になっていった。その長年の努力が実を結び、神戸大学が世界に先駆けてクーラカンシリの1986年プレモンスーン期の登山許可を獲得したのである。初登頂に挑戦するチャンスは1回きりで、我々が1986年のプレに失敗すると、同じ年のポストに登山許可をもらった隊にチャンスは移っていくのである。だから万全の準備を行って、最強の登山隊を仕立てなければならない。

クーラカンシリの許可が来た時には最初、隊員として立候補するべきかどうか悩んだ。子供が0歳、妻が納得してくれるだろうか。仕事を4か月休むことを職場が許すだろうか。自分が行かなくても隊員候補はたくさんいる。しかし、クーラカンシリはなんと魅力的な山だろう。「クーラ」は「天帝」、「カンシリ」は「雪山」、つまり「天帝の峰」の意がある。その名は以前から知っていた。古来、チベットのラサから南へヒマラヤを越えてインドのカルカッタへ向かう交易路から見えるため、その存在だけは世界の登山界には知られていた。しかし、その姿をとらえた写真がほとんどなかった。唯一、大阪府立大学の中尾佐助氏がブータン国境からとらえた南側の写真があった。もちろん登山を試みた登山隊はいない。まさに手つかずの、しかも7500mを越えた世界で最も貴重な処女峰である。とりあえずは準備活動に参加することとして、行くか行かないか、その後に考えようと思った。

ところが、何か不思議な力が働いたのではないかと思ってしまうほど遠征に参加できる方向に物事が動いて行った。大学からの支援と職場の理解が得られたことが大きかった。職場（兵庫県庁）では、学術調査隊員として参加することが認められた。この1986年の隊は神戸大学全学を挙げて派遣することとなり、登山隊だけでなく、文化人類学、社会学、医学、植物学、昆虫学、地質学、地形学などの助教授の先生方が学術調査隊を組織して一緒に行くことになった。そこで、学長から推薦書を出してもらって、登山もするが学術隊の沖村助教授（私の大学時代の恩師にあたる）の助手もするということにしていただいた。こうして約4か月の参加を職場から認めてもらった。もちろん直接の上司や同僚が働きかけてくれたことが大きかった。ここまで話が進んでしまうと妻も納得はしないまでもあきらめざるを得なかつたようだ。こうして、遠征という夢が実現することになった。

1986年3月4日、神戸大学チベット学術登山隊（総隊長平井教授）は多くの人に見送られて神戸港からチベットへ向けて出発した。上海に上陸して、成都経由でラサの空港に降り立った。かつてチベットが鎖国をしていたころ「禁断の都」と呼ばれたラサ、その昔ヒマラヤを越えて苦労に苦労を重ねラサに辿り着いた日本の僧河口慧海師や、戦争中インドの捕虜収容所から脱走してラサに辿り着いたドイツの登山家ハインリッヒ・ハラー（「チベットの七年」の著者）らには申し訳ないほど簡単にそのラサに来てしまった。標高3700mの高地にあるため空気が薄く高度障害が出て何人かはすぐに寝込んでしまったが、私はこの高度では元気だった。当たり前であるが、チベットは日本と全く違った世界だった。乾燥冷涼の気候風土は樹木が育たず山々は岩肌が露出し殺伐とした景色がどこまでも広がっている。空気中の湿度が低いため、太陽光線が非常に強く、遠くまではっきりと見通すことができる。そのため距離感がおかしくなり、本当は遠くの山がすぐ近くにあると錯覚し、行

けどもなかなか近づかないことがよくあった。自然環境は日本とはずいぶん違っていたが、人々の顔つきは日本人と似ている。色が黒いことを除けば見分けがつかないほどで、田舎の農家のおじさん・おばさんという感じで親しみが湧く。さらに驚いたことに、数の数え方のイチ、ニ、サン・・・ジュウの発音がチベット語でも同じように発音するのである。日本語のルーツがチベットにあるのではないかと思ってしまう。しかし、信仰の厚さは日本人とはかけ離れている。チベット仏教のラマ教が人々の生活の隅々まで浸透して、ラマ教を中心にして動いていると言っても過言ではない。ラマ教では何事も回転する方向が時計回り（右回り）にしないといけない。例えばマニ車という仮具がある。中にラマ教の経文が入っている筒に棒が付いて回転できるようになっている。この筒を一度回転させるとありがたい経文を一回読んだことになりご利益があるという。人々は歩きながらや仕事しながらも、手が空いているとこれを回している。この回転方向は時計回りにしなければならず、反対に回すと悪霊が出てくるとか。ラサの中心に大昭寺（チョカン）というラマ教総本山がある。巡礼者はこのお寺の周りを五体投地しながら回っている。五体投地とは「オン・マニ・ペメ・フン」と祈りながら体を前になげうって手の届いた場所で立ち上がる、これを繰り返し尺取虫のように前進していくのである。このお寺の周りを回るのも時計周りとなっており、逆行することはできない。行き過ぎてしまうと、もう一周してこないといけない。また、至る所でタルチョと呼ばれる五色の旗が飾られている。この旗にも経文が印刷されており、旗が風ではためくと読経が天に届くというので、風の通り道の峠などには必ずこれが嫌というほどたくさん括り付けられている。その五色の意味は青が空、白が雲、赤が太陽、緑が水（川）、黄が大地を現しているとか。このようにチベットはラマ教が支配する世界である。



ラサで食料など必要な物資を調達し、3月13日いよいよクーラカンリのあるロザ地方に向けてマイクロバスで出発した。ラサから南へ向かうとヤルツァンポというチベット最大の河に出る。ヤルツァンポはここから遙か西方の山中に発しヒマラヤ山脈の北側を東に流れ、山脈の東端を廻ってインド・アッサム地方に流れ下る。インド平原に至って布拉マプトラ河と名を変えたあとベンガル湾に注いでいる、全長2900kmの大河である。ヤルツァンポの谷からカンパ・ラという峠を越えるとヤムゾユム・ツォ（「ツォ」は湖の意）に出る。湖畔の街ランカーズで街道と離れると道はぐっと悪くなる。どこが道か判然としなくなるが、ときおりどこからともなく馬を連れた旅人が現れ、ロザ地方への通路であることがわかる。ヤムゾユム・ツォから一段登り小さな峠を越えると辺りは荒涼とした平原となり、やがて天上の湖プマユム・ツォの畔に出る。標高5千m。南方に目指すクーラカンリの雄姿が初めて肉眼でとらえることができた。準備を初めて1年半、やっとここまで来たかと全員感慨ひとしおであった。

このプマユム・ツォの風景を描いたのが、*pic.2 「天上の湖から天帝の峰を望む」*である。鳥が羽を拡げたように見えるのがクーラカンリで、3つのピークのうち右側にあるのが頂上である。頂上からさらに右へ「黒岩」と呼んだ岩峰があり、登頂ルートと目されている西稜へ続いている。3月のプマユム・ツォは実際には湖面が真っ白に凍結していたが、それでは色彩的に面白くないので、氷が融けたときに見せる深い青の湖面を再現した。馬を連れた旅人とタルチョを湖岸に配置しチベットらしくしてみた。

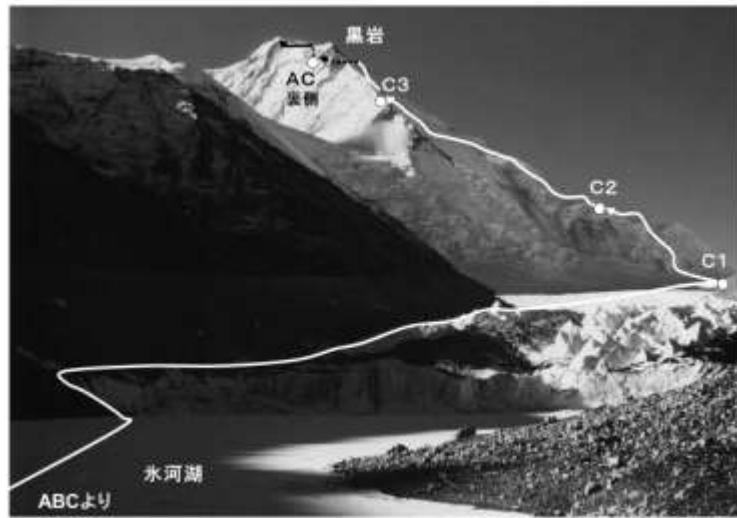
プマユム・ツォからモンダ・ラという峠を越えてロザ谷に下り、翌日標高4500m地点にベースキャンプを建設した。車で入れるのはここまでで、付近には小さな村があった。クーラカンリ頂上まで標高差3千m、直線距離で15kmの地点である。ここから西氷河末端のアドヴァンスドベースキャンプ(ABC)まではヤク（毛の長い高地牛）や馬によって荷揚げを行った。

3月21日、いよいよ本格的な登山を開始した。早朝、ABCの背後のモレーン（氷河堆石）の上に立つと凍った氷河湖を前に西氷河が膨大なセラック（氷塔）を押し出している。その背後、遙か高みにこれから登ろうとしている西稜とクーラカンリの頂上が望めた。まるで空へ登っていくような高いところにあった。その時の光景が *pic.3 「空へ」*である。この大自然が作り出す圧倒的な景観の前に我々はなんと小さい存在であろうか。それをこの画から感じていただけるだろうか。

（「空へ」はこの構図で他に何枚か描いたが、そのうちの1枚は中国登山協会に寄付し、別の1枚は神戸大学学長室に掛けられている。）

小さな存在である登山隊はそれでも氷河を遡り、氷壁を攀じて、確実にキャンプを西稜上に伸ばしていく。標高6400mの第2キャンプができるころから高度障害の出る隊員が増えていった。私もその一人で、休養のために

いったんベースキャンプまで下った。平地の半分以下という低酸素状態はそれを経験したものにしかわからないだろう。頭痛、むくみ、どうしようもない倦怠感が常に付きまとい、少しの行動で動悸が激しくなる。テントの中で登山靴を履くだけでハアハアと息が上がる。そういう中での各キャンプ間の荷揚げの苦しさは今まで味わったことがなかった。一方で高度障害のほとんど出ない隊員もいた。どうも平地での体力に関係なく、各人の体质が左右するらしい。



元気な隊員たちの頑張りで、4月20日、頂上の手前の黒岩と呼んでいた岩峰を南側に回り込み、標高7250m地点にアタックキャンプが作られた。いよいよ21日、リーダーの居谷千春先輩以下5人の第1次アタック隊がキャンプを出発した。急斜面を百mほど登ると、黒岩を越えたところの頂上稜線に飛び出した。鋭いナイフリッジになった頂上稜線を慎重に辿って、16時15分、ついにクーラカンシリの頂きに立った。私はそのとき、サポートのために

上がっていた第3キャンプ（標高6900m）で船原尚武君と二人でトランシーバーから流れる居谷先輩の登頂の報告を聞いていた。自然と涙が出てきた。翌22日、第2次アタック隊の2名をサポートするために、船原君と第3キャンプからアタックキャンプに登った。標高7250m、頂上までの300mを残しこれが自分にとってクーラカンシリ遠征の最終地点となった。そしてこの高度が生涯の最高到達高度である。



クーラカンシリ頂上稜線

このようにしてクーラカンシリ登山を終えたが、神戸大学山岳会はこの遠征で二つの大きなものを得た。その一つは中国登山協会与中国地質大学との太い縊である。この登山隊には5人の中国人の若者が高所協力員として参加してくれた。彼らは、湖北省武汉市にある中国地質大学の学生で登山の経験があった。主にABCから第1キャンプへの物資の荷揚げに協力してくれた。彼らの体力は抜群で一人で30kgの重さの食料や装備を毎日毎日第1キャンプへ届けてくれた。彼らのおかげで日本人隊員は上部キャンプに集中することができた。初登頂の影の功労者たちである。彼ら5人のうち4人、李致新、

王勇峰、張志堅、馬新祥はこの年に中国登山協会に採用されるのであるが、4人とも非常に優秀だったため協会の中で出世し、後にトップに上り詰めるのである。彼らがクーラカンリ登山を通じて神戸大学山岳会に好意を持ってくれたことで、1988年のチェルー山遠征、2003年から2009年のカンリガルポ遠征へと繋がっていくこととなったのである。

もう一つ得た大きなことは、外国人の入域が厳しく制限されていた東チベットで未知の大山脈と出会ったことである。クーラカンリ登山が終わってラサに帰った後、四川省成都まで陸路2200kmを学術調査しながら辿った。往路は飛行機を使って数時間で飛んだところを復路は20日間かけて地を這って成都に戻ったのである。当時はこの東チベットから四川省西部地域の情報はほとんどなかった。そこはヤルツァンポ、サルウイン、メコン、長江、雅龍江などの大河が南北に平行して流れ、河と河の間には6千m級の山脈が連綿と続く世界でも類を見ない、誠に興味深い地域である。この大河と山脈を横切っていく道は「川蔵公路」と呼ばれ現在でも世界一危険な国道と言われている（川は四川、蔵はチベットの意）。この川蔵公路では至る所で五体投地をしながらラサに向かう巡礼者を見た。故郷を立って何か月、何年も施しを受けながらラサへ巡礼をするのである。我々日本人には考えられないことだが、一生に一度の巡礼を彼らは嬉々として五体投地をする。その姿は羨ましくもある。

我々はラサを出発して7日目、標高4千mのラウー（然烏）という集落に辿り着いた。ここは湖と森、雪を被った山が作る素晴らしい別天地だった。チベットというよりもまるでスイスアルプスかカナディアンロッキーである。そのラウーで重要な情報を得た。中国登山協会の隊付き連絡官が「この奥には知らない大きな氷河を持った巨大な山がある」と言った。それが「カンリガルポ」であった。我々にとって次の目標となる山を見つけたの

である。



ラウーの景色

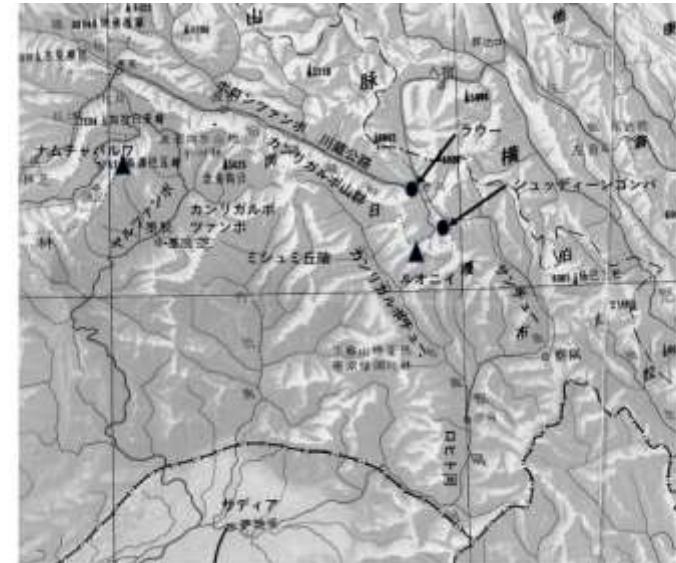
カンリガルポ山群 KG2；ロプチン峰

カンリガルポという地域

いわゆる狭義のヒマラヤ山脈（グレートヒマラヤ）の東の端は、ヤルツアンポ川の大屈曲で区切られたところまでというのが一般的である。この大屈曲の内側（西側）にはナムチャバルワが聳えている。大屈曲を越えてヒマラヤ山脈のさらに東に連なる、東チベット、雲南、四川にまたがる広大な地域はつい最近までほとんど秘密のベールに覆われていた。1986年クーラカンリ初登頂後、神戸大学山岳会がこの地域を横断する形で世界に先駆けて川蔵公路を辿り、カンリガルポの山々に接した。その後、中村保氏（日本山岳会、一橋大学山岳会）らが1990年以降、精力的にこの地域を踏査され、世界に情報発信を行われたことから概要がようやく明らかにされた。

このヒマラヤの東の地域では、ヤルツアンポ・ブラマップトラ、イラワジ、サルWIN、メコン、長江の中上流部がチベット高原の東南縁辺部を激しく浸食し、プレート運動に伴う地殻隆起と相俟って、地球上でもまれに見る険しい地形を形作っている。20世紀前半にこの地域を広く踏査し、ヒマラヤの代表的な花、青いケシ (*Meconopsis Baileyi*) を世界に紹介した英国のプラントハンター；キングドンウォードは著書「青いケシの国」の中で「深い浸食の国；The Land of Deep Corrosions」とこの地域来形容した。その深い浸食の一例を示すと、メコン河とサルWIN河の間にある梅里雪山主峰カワカブは、メコン川の河床からの高度差が実に4700mに達している。また、前述の大屈曲点にあるヤルツアンポゴルジュをはじめ、怒江、玉曲の大峡谷、長江の虎跳峡など長年人間の侵入を拒んできた大峡谷が存在している。この世界最大規模の山岳地帯（多数の山脈を包含して「横断山脈」と表現されている）である広大な地域には幾重にも山脈が重なり、その最も西、すなわちヒ

マラヤ山脈に接するところにカンリガルポは存在している。



カンリガルポはヤルツアンポゴルジュを挟んでナムチャバルワと対峙しており、ヤルツアンポ支流のポロンツアンポ、カンリガルポツアンポ、ロヒト河支流のサンチューとカンリガルポチューに挟まれた東西280km、細長いひょうたん型の大きな山脈である。後述する2009年登山隊の井上達男隊長の研究によれば、その中にルオニイ（推定6882m）峰を筆頭に47座の6千m峰があるとしている。大まかに地形を見ると、南側のアッサム、ミャンマーの平原からミシュミ丘陵と呼ばれる3千～4千mくらいの前山の背後に、一気に6千から7千m近い山稜が屏風のように突っ立っている。ミシュミ丘陵とカンリガルポの間には標高2千m前後でカンリガルポチューが北西から南東へ一直線に深く切れ込んでいる。

このような地形は、ベンガル湾からの極度に湿った季節風、いわゆるモンスーンやサイクロンの影響をまともに受けることになる。アッサム地方は世界でも最も降水量が多い地域であり、カンリガルポが形作る7千mの屏風に当たった季節風はここで一気に雪を降らせるため、まれに見る豪雪地帯となっている。このしくみは冬の日本海からの季節風で上越山地に豪雪が降るのと同じである。豪雪はカンリガルポの大きな特徴である。このため、他の地域と比べて巨大な氷河が発達している。ポロンツァンポ最奥のラグー集落から見えるラグー氷河はチベットで最大の面積を持つ氷河である。また、最高峰ルオニイのあるアタ氷河の南支流は膨大な氷の量を押し出し、標高2千m近くまで氷河が融けることなく流れ下っている。カンリガルポとはチベット語で「白い雪山」という意味であるが、遠くからカンリガルポの主脈を見ると前山の黒い岩山の後に真っ白な神々しい姿が見られ、その山脈名はなるほどと納得させられる。

以上のように、カンリガルポの特殊性は一つには険しい地形、巨大氷河、豪雪などその自然環境の厳しさと美しさであるが、もう一つ挙げるとすれば近づき難いが故の未知、未探検地域としての魅力であろう。

カンリガルポへのアプローチは、現在でこそ北側にラサ・成都を結ぶ川蔵公路が通過しており、入域許可取得という難問題を除けば交通的には比較的容易と言える。しかし、20世紀初頭まではカンリガルポの北側にポバと呼ばれる人たちの半独立国があり、外部からの侵入を嫌っていたため接近することが容易ではなかった。北側よりもさらに困難だったのが南側からのアプローチである。日本の屋久島と同じ北緯29度に位置するカンリガルポの南側では、アッサムやミャンマーの熱帯雨林地帯が広がり、雨期に降り続く降雨、植物の生い茂ったジャングルに加え、山ヒル、ダニ、猛獣やあらゆる毒虫の生息、マラリアなどの伝染病の蔓延、さらに、ミシュミ族やアボール族とい

った非友好的、好戦的な未開部族が跳梁し、昔から南からの侵入を著しく困難なものとしていた。インドを植民地として領有していた英國は中国やとりわけロシアからのチベット干渉に神経を払い、有事に備えチベットの地理調査を秘密裏に行った。パンディットと呼ばれる現地人密偵を送り込んだが、最も調査に困難を極めたのがこのアッサムの北側の地域であった。

カンリガルポの探検の歴史は、1911年に始まる。英國軍人のF.M.ベイリー大尉が成都から長江上流のパタンを経てメコン、サルワイン河の中流部、イラワジ河の源流部を横断し、ロヒト河からアッサムに抜けているが、その途中でラマ教寺院のシュッディンゴンパに立ち寄った。これは、いわばカンリガルポの東縁に沿ったルートを辿ったこととなる。なお、シュッディンゴンパはラウーとラグーの中間に位置し、私もこの寺院の横を何度も通過している。

1913年、同じベイリーが同僚のH.T.モーズヘッド大尉とともに、未踏のヤルツァンポゴルジュ（峡谷）に入り、ヤルツァンポの下流がブラマプラであることを証明した（それまでは、ヤルツァンポがイラワジにつながっているとの説もあった）。その探検行の途中でカンリガルポツァンポに入り、カンリガルポ山群西端部のスイ・ラという峠を南から北へ横断している。その後、ルナン盆地で前述の青いケシ、*Meconopsis Baileyi*を発見している。「Baileyi」はベイリーの名前をとってキングドンウォードが命名した。

1924年、フランス人女性のダヴィッド・ネールが巡礼に変装して雲南からラサへ向かう途中で、カンリガルポ北西縁の現在の川蔵公路のルートを通過している。

1933年、キングドンウォードは、アッサムのサディアからロヒト川を遡り、南側から初めてカンリガルポの核心部に入った。主稜線南側のカンリガルポチューからアタカン・ラという氷河の峠を越えてラグー集落を通り、シュッ

ディンゴンパに抜けている。このとき、峠の南側の谷間からカンリガルポの最高峰と見られる山（チョムボ峰と呼んでいた）を写真に撮っている。この写真がどの山を撮影したものか長い間わからなかったが、2009年、ルオニイテラスに達した我々によってルオニイ南稜の肩を撮影したものであることが76年ぶりに確認できた。

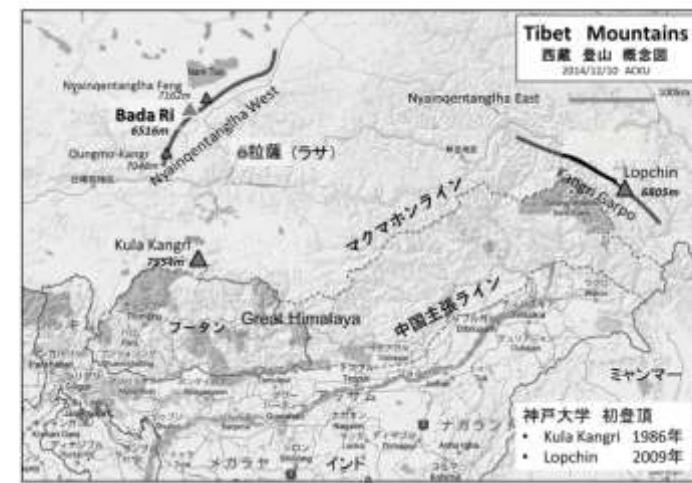
1935年には英国人コールバックとハンベリー・トレシーが東からシュッディンゴンパに入った。コールバックはアタカン・ラを北から南へ越えてカンリガルポチューに下った。その後、カンリガルポチューを遡り、カンリガルポ・ラという氷河の峠を越えてカンリガルポツアンポに入り、さらにカンリガルポ主脈の峠（チンドゥル・ラ）を北側に越えている。コールバックのカンリガルポ・ラ越えはその後トレースされた記録はない。なお、ハンベリー・トレシーはシュッディンゴンパからカンリガルポの北縁に沿ってポンツアンポ川を下りダシンゴンパでコールバックと再会し、二人はサルウイン源流に向かって北にニエンチェンタンラ山脈を横断した。

その後、キングドンウォードは、1950年に再度サディアからロヒト川を遡ったが、震源のリマ（カンリガルポチューとサンチュー合流点）でアッサム大地震に遭遇し、命からがらサディアに逃げ帰っている。

以上が数少ないカンリガルポへの探検であるが、第2次大戦後、中華人民共和国が成立し、1950年からチベット介入が始まった。その結果、次に述べる中印国境紛争が勃発し、最近に至るまで全く外国人が立ち入ることができなくなってしまった。

世界地図を見ると、インドのアッサム与中国・チベット自治区との国境線は二重に引かれていることに気づく。北側のラインは「マクマホンライン」とよばれインドが主張しているラインで、南側のラインはアッサム平原と山地との境界に引かれた中国が主張しているラインである。元々、20世紀初め

にはチベットとインドの国境については確定しておらず、1913年、当時インドを支配していた英領インド政庁の外務参与マクマホンが国境確定の会議を提唱して、国際会議がインドのシムラにおいて開かれた。この「シムラ会議」には、英領インド政庁代表、チベット政府代表、チベットの宗主国として中華民国代表が参加して話し合われた。このとき定められたのがマクマホンラインである。しかし、当時、中国は辛亥革命で清朝に代わって中華民国が成立して2年余りであり、国内政治は軍閥が台頭し混乱の中にあった。その後1949年に成立した現共産党政権は、正式な国の代表がシムラ会議に参加していないかったとして、会議の合意を認めておらず、有史来中国・チベットの影響が及んでいた山岳民族が住む範囲まで、すなわちアッサム平原と山地部との境までを中国チベット領であると主張している。イギリスからマクマホンラインを引き継いだインドと中国はこの2本の国境を巡って1962年に武力衝突を起こしている。現在は休戦状態で2本の国境の間は緩衝地帯となっている。



そのマクマホンラインはカソリガルポのすぐ南、基本的にはカソリガルポチューの南側に沿うように引かれているが、この区間で地形を無視して不思議に出入りのある複雑な形をしている。なぜこのようなラインが引かれたのか謎であるが、1913年当時の認識では、カソリガルポチューの支流がミシュミ丘陵側に切れ込んでおり、カソリガルポチューの流域をチベット側に入れたためではないかと推測される。しかし、実際にはそのような支流は存在せず、結果的に地形を無視した根拠もない線が生き残っている。いずれにしても、カソリガルポ山群のほとんどはマクマホンラインの北側にあるためチベット領には間違いないが、サンチュー・カソリガルポチュー沿川のザユール（察隅）県には国境監視のため人民解放軍が展開しており、外国人の立ち入りはほぼ不可能なほど厳しく規制されている状況にある。

このように政治的な理由によってカソリガルポはベールに包まれたヒマラヤの東のなかでも一般人が最も近づき難い場所となっており、現在地球上に残った最後の未探検地域として、世界の登山界だけでなく地理学、地質学、生物学者など学術面からも注目的となっている。カソリガルポの際だった特殊性と魅力はここにある。

2003年 ルオニイ峰遠征

クーラカソリ遠征でカソリガルポを知ってから16年、登山許可の交渉を続けてようやくその実が結んだのが2002年である。世界で初めてカソリガルポにおける正式登山許可が神戸大学山岳会にもたらされた。これは中国登山協会の実力者、李致新や王勇峰らクーラカソリの友人たちが努力してくれた結果である。目標のピークを最高峰のルオニイに定め2002年には偵察隊がアタ氷河に入った。アタ氷河はルオニイの北側に大きな盆地状の内院を作る氷河で、その内院に積もる大量の冰雪を集め流れ下っている。内院の出

口にはアイスフォールがあり、そこから一部は北に一部は南にと分流している。偵察の結果、ルオニイに登頂するためには北側の分流氷河からアイスフォールを越えて内院に入り、そこから北面を登るルートが有力と考えられた。2003年10月、カソリガルポにおける最初の登山隊が送られた。総隊長平井一正名誉教授ほか8名の登山隊である。登山隊はアイスフォールを突破し内院に入り込むことに成功したが、北面のルート選定に手間取り、悪天候が続いたことによって日数を使ってしまった。ようやく標高5850mのルオニイテラスと呼ぶ台地に登りついたが、そこからの最後の千mの雪壁の登攀は非常に困難が予想され、残り少ない日数では無理と判断しルオニイテラスで登山を断念することとなった。

2007年 再偵察

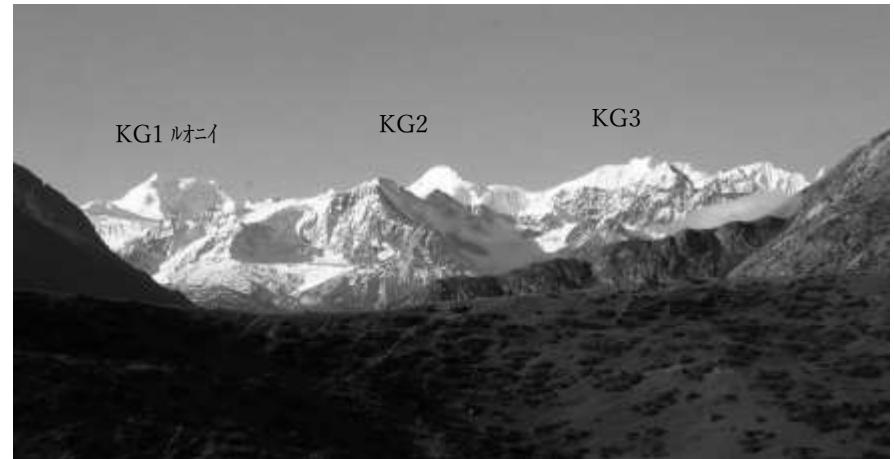
2003年の遠征で、標高こそ7千mに及ばないものの、カソリガルポ登山は困難なものであることが分かった。それは、一つは天候が非常に悪く、ポストモンスーンといえども1週間も雪が降り続くこと、もう一つは降雪量の多さから不安定な雪壁、雪庇が発達しておりルート自体が困難なことである。特にルオニイの最後の雪壁は不安定極まりなく困難なうえに危険であることが分かった。ただ、山岳会としてこのままでは終われない。

3年が経った2006年はクーラカソリ登頂20周年に当たっていた。11月、中国登山協会から李致新副主席と王勇峰部長を招待して神戸で祝賀会を開いた。それは、カソリガルポへの再挑戦の可能性を彼らに打診するという目的も含んでいた。祝賀会の後、2008年に再挑戦したいと伝えたところ、副主席から、中国地質大学との合同登山としてはどうかとの提案があった。彼らは二人とも同大学の出身者であり、神戸大学と中国地質大学はすでに1988年のチェルー山合同登山を経験していた。（ジャラリ（雀児山）の項参照）日

中合同とすることで、困難なカンリガルポの登山許可取得に有利に働くものと思われた。また、我々は登山隊に参加できる隊員の人数が少ないと悩んでいたが、強力な中国隊員が加わればより登山隊はパワーアップされる。まさに渡りに船、神戸大学側はその提案を受け入れることにした。翌年、平井教授と井上達男山岳会長が武漢を訪れ、合同登山の合意に至った。中国地質大学側のリーダーは、1988年に一緒にチエラー山に行った董范・体育部教授であった。気心が知れた優れたパートナーが得られたわけである。そして、中国登山協会が強力なバックアップを行ってくれた結果、合同登山隊は人民解放軍からの入域許可を取得することができた。この中国登山協会の奔走が無ければカンリガルポへの登山は何も始まらなかつたであろう。

登山許可と隊員確保はめどがついたが、別の大きな問題はルオニイの危険な雪壁であった。あそこを登れるかという不安感が常にまとわりついていた。ところが、詳しく調べていくと、本当にルオニイが最高峰かどうか怪しくなってきた。というのは、ルオニイを最高峰とする根拠の地図は戦時中にソ連が行った航空測量に基づいて作られていたが、ピークの標高の誤差が大きいことがわかつてきた。ルオニイの北西に連なる二つのピークは高さが同じくらいで、遠くから撮影された3つのピークが写った写真では、見ようによつては高さが逆転するように思われたのである。私たちはルオニイを KG 1 (KG はカンリガルポの頭文字)、その北西のピークを KG 2、さらに北西のピークを KG 3、それらをまとめて3姉妹峰と呼ぶことにした。人里から見えにくい KG 2 と KG 3 には決まった呼称がなかったのである。この高さ問題を解決するには現地で直接測量するほかはないと考え、2007 年に再偵察を日中合同で実施することになった。その偵察に誰が行くかということで、クーラカンリで測量をやった経験から私が行くことになった。あと山岳部の現役学生 2 人、中国地質大学から 4 人（董范は参加していない）の合計 7 人

が合同偵察隊となった。隊長は私、副隊長は中国側の牛小洪・副教授、偵察の目的は KG 1、2、3 の測量と登攀ルートの確認である。



カンリガルポの3姉妹峰（ザユール街道より遠望）

10月30日、川蔵公路のラウーを出発しシュッディンゴンパの横を通って最奥の集落であるラグーに到着した。しかしここで思わぬトラブルが起こった。偵察隊の世話役兼監視役であるチベット登山協会の連絡官が、日本から持つていった測量用トランシットを見て、外国人が中国でそれを使うことは法律で禁じられている、と言った。クーラカンリでは何も言わずに連絡官の前で堂々と測量したのだが、やはりここは緊張する国境地帯なのだと思い知らされた。泣く泣くトランシットをラグーに置いていった。これで目的の一つの測量ができなくなった。

翌日、気を取り直してラグーを出発しベースキャンプを目指した。村はずれにある広々とした放牧場のコーギンカルカに出ると前方に台形のルオニイが仰ぎ見えた。クーラカンリから 21 年、ようやく念願の山を目前にして、

昨日のトラブルを忘れて清々しい気分に満たされた。この時の光景が *pic. 4 「東チベット・カンリガルポ山麓を行く」* である。我々の荷物を運ぶヤクとヤク使いが前を進んでいく。70数年前、キングドンウォードははるばるインドからアタカン・ラを越えてこの地に来たのである。その時に見たであろう光景である。



その日、アタ氷河北支流の末端、氷河湖の横にベースキャンプを作った。2003年のときのベースキャンプと同じところである。ここから先は氷河の上をすべての荷を自分たちが運ぶ。前進キャンプをアイスフォールの手前に作った。いよいよアイスフォールを突破して内院に入り込む段になって、中国人たちが危険だからと言って前進を拒んだ。ルート偵察のためには何としても内院に入り込む必要がある。説得したが怖がっているのを無理に行かせることはできない。やむなく、日本人3人だけで7日分の食料とテントをもって前進することにした。クレバスの錯綜するアイスフォールに苦労しながら

これを突破し、内院の入り口にキャンプを作った。ここを拠点に3つの峰の北面を偵察することにした。しかし、翌日から毎日雪が降り積もり、まったくテントから出られない日が続いた。11月8日、厳しく冷え込んだ朝、テントの周りの霧が晴れると何日かぶりの青い空と内院を取り囲む朝日に輝く峰々が現れた。痛いような感覚の寒さの中、3人はその光景に見とれた。やっと晴れた。

その日、氷河の奥へ偵察に出かけた。アタ氷河の上部は360度見渡す限り氷雪を纏った峰々に囲まれ、晴れた日の景観のすばらしさは遙かに想像を超えて美しかった。陽を受けた斜面は白く輝き、影の部分は深い空の色を映す。そこに入り込むと、まさに青と白だけの夢の世界だった。

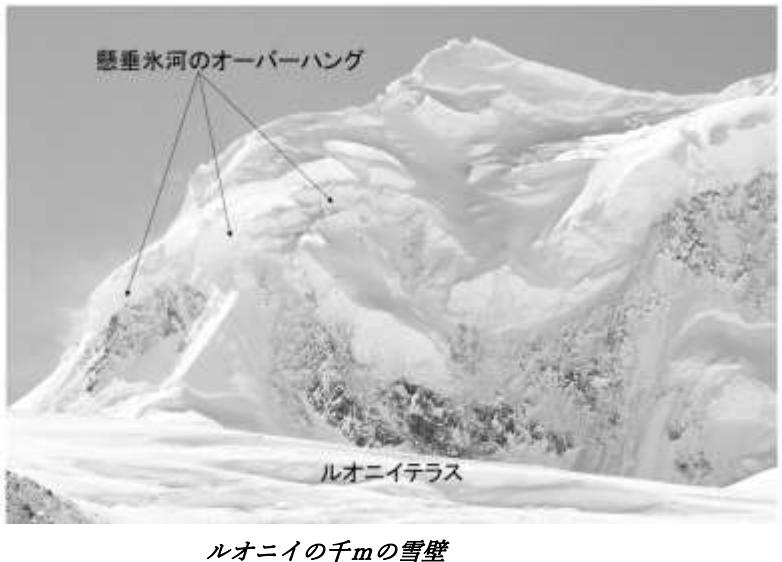


阿扎氷河(Ata Glacier)

阿扎氷河の三姉妹峰(KG-1,2,3) 2007年偵察隊撮影

キャンプから4時間かけて氷河を遡り、そこから3つのピークが並んでいる対岸（内院の北側の壁）に登りルートを偵察する。まずはKG1ルオニイの雪壁であるが、4年前と比べて雪壁の形が崩れている。やはり不安定な壁が崩落していることがわかる。もし登攀中に崩壊すると助からないだろう。KG3（推定 6740m）はアタ氷河から取り付くのはとても不可能な氷壁が要

塞のように立ちはだかり、これも見えている範囲では登攀可能なルートはない。しかし、私の目を引いたのはアタ氷河の王者のような KG 2 だった。ルオニイと比べて高さは劣るかもしれないが、その堂々とした巨体はまさに王者だった。その時あれに登ろうと思った。 ⇒ *pic. 5 「KG 2との出会い」*



ルオニイの千mの雪壁

測量ができなかったことにより、結局 3 つの峰の高さ関係は分からなかつた。おそらく KG 1、2、3 の順であろうと思われるが、実際のところは現在でも確実とは言えない。 *pic. 6 「アタ氷河の偵察を終えて」* は何とか偵察を終えてほっとしてキャンプへ引き返す途中である。午後になり霧がかかり始める。来るべき再会の日を約して山々に別れを告げた。

2009 年 初登頂

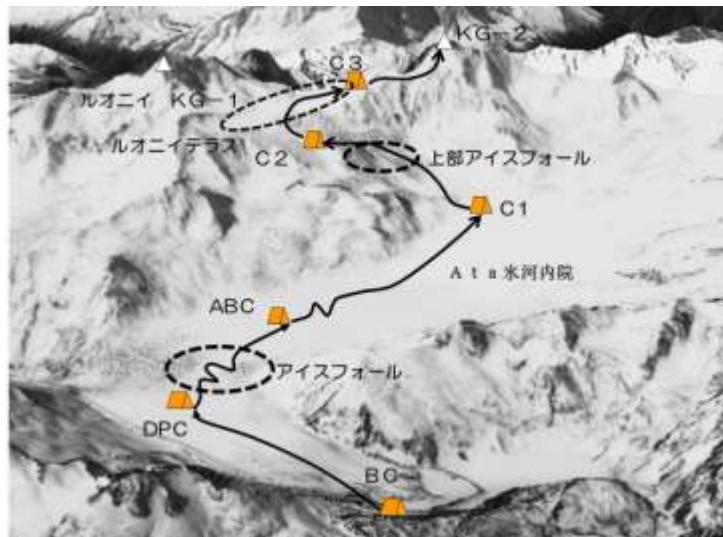
偵察隊が写した写真を検討し目標のピーカーをルオニイから KG 2 に変更することになり、登頂を目指す本隊は 2008 年秋に出すべく準備を進めることになった。ところが、3 月にチベットで暴動が起こった。中央政府の少数民族の統治に不満を持つ何人かのラマ教僧侶が抗議の焼身自殺を図った。これをきっかけとして暴動が起きたのである。さらに、5 月 12 日、四川大地震が発生し、チベットにも被害が及んだ。また、2008 年は北京オリンピックが開催されるため、厳戒態勢が登山に影響を与える恐れもあった。さらに 9 月に起こったリーマンショックによる景気低迷で資金集めができるかどうか怪しくなった。結局、KG 2 遠征は 1 年延期することになった。ただ、結果論であるが 1 年延期したことは我々にとって幸運だった。2009 年のカソリガルポは異常に降雪が少なく、天候に恵まれてほとんど毎日登山活動ができた。それまでの 3 回のカソリガルポでは考えられないくらいの行動率である。また、氷河上の積雪が少ないため、クレバスはほとんど雪に隠れることなく見えていた。ヒドンクレバスという危険が少なかったことは登山隊員に心の余裕をもたらした。

2009 年の隊員の構成は次のとおり、日本人 6 名、中国人 10 人である。

日本側 隊長 井上達男（年齢 62）、副隊長 山田健(54)、
登攀リーダー 山本恵昭(51)
隊員 矢崎雅則(35)、近藤昂一郎(23)、石丸祥史(19)
中国側 隊長 董范(49)、副隊長 牛小洪(41)、同 李倫(32)
隊員 デチン(22)、ダンタ(22)、袁復棟(24)、張瑜(24)
李生鵬(29)、張群(24)、宋紅(20)

中国人のうち、デチンとダンタはチベット族でありこれまでにチョモランマに 3 度登頂している。袁は青海省出身で高地に育っており、前年の北京オ

リンピックでは聖火をチョモランマの頂上に持ち上げたヒーローである。他の中国人達も前年に8千m峰のチョ・オユーに登っているので、初めから高所順応ができた。董范は2007年の偵察隊の時とは見違えるような最強チームを作り乗り込んできた。



登山ルートはこれまで三度アタ氷河に入っているのでほぼ見当がついていた。アタ氷河の北分流の末端、標高4320m地点にベースキャンプ(BC)を置き、アイスフォールの下4440mに荷物集積用のデポキャンプ(DPC)、アイスフォールの上4660mにアドバンスドベースキャンプ(ABC)、アタ氷河の上流、多くの支氷河が合流する地点4890mに第1キャンプ(C1)、上部アイスフォールを越えた5680mに第2キャンプ(C2)、ルオニイテラスと名付けた広い雪原5910mに第3キャンプ(C3)と進め、ここから最終アタックを敢行するという計画であった。

2009年10月15日にラサを出発し、最奥の村であるラグेに17日到着し

た。2007年の偵察以来2年振りの集落は小学校や集会所が新しくできていたが、そこから見えるチベット最大の氷河であるラグー氷河の雄大な流れは少しも変わっていない。ゴンヤダ、ゼー、ハモコンガ、そして30km奥の氷河源頭のゲムソングなどの峰々が超然として聳えている。⇒ *pic.7 「ラグー氷河」*



ベースキャンプの日中全隊員とポーター

前列左から二人目山田(著者)、右へ董范隊長、井上隊長

ラグーからヤクとポーターにより荷物を運搬し、18日には全員BCに入った。翌19日より登山を開始した。20日にDPCを作ったあと、アイスフォールのルート工作に取り掛かった。ここを過去3度突破している日本側が先行してルートをつけていった。アイスフォールの中に入ると、縦横にクレバースが口を開け、氷が押し合い波打っている。まるで荒れ狂う大海原を行くような錯覚を覚える。背後にはシャナ峰(推定5614m)が遙か高みから我々を

見守っている。 ⇒ *pic.8 「アイスフォールを行く」*

登山の初めのうちは天候が不安定で、午前中に降雪があり午後から回復するというパターンが続いたことから、半日しか行動できないことが多かった。そのため荷揚げに日数が嵩み、24日によくやくABCを建設した。このころから天候は安定してきた。夜明け、氷河の奥に聳えるKG3の頂上部分に灯がともったように陽が当たると、見ている間にオレンジ色に輝く範囲が山頂からすそ野に広がっていき、それにつれて輝きも増していくのである。地球が自転していることがわかる雄大な景観である。これまで見たこともないような素晴らしいモルゲンロートだった。 ⇒ *pic.9 「アタ氷河の夜明け」*

ABCからは多少のクレバスの迂回があったが、ほぼ平坦で広大なアタ氷河内院を進む。やがて氷河の上流、KG2とKG3の直下、多くの支氷河が合流する地点にC1を建設した。ABCからC1への荷揚げを行っていたある日のこと、先行する隊員のトレースをひたすらたどっていると、前方のガスが切れてKG3が驚くほど高さに巨体を現した。その壮大な氷の芸術品と言てもいいような姿に荷揚げの苦しさを忘れしばし見とれた。 ⇒ *pic.10「氷河の登高」*

C1からはこれから登頂ルートが一望され、アタックの指揮を執るには最適の位置である。C1からC2へのルートは氷河の崩壊地（上部アイスフォール）の中を標高差800mの登りであり、技術的にはここが本登山の核心部といえる。上部アイスフォールの工作はデチンとダンタが行い、フィックスロープ600mを使用し突破した。彼ら二人は共にラサのチベット登山学校で技術を磨き、22歳の若さにしてすでに3度のチョモランマ登頂を果たしている。日本側は彼らのペースに引きずられる格好となり、C2への荷揚げでかなり疲労がたまっていた。11月1日、中国側はC2に4人が入り、翌2日にはC3予定地までルートを付けて、天候が悪化する中、その日にC1まで下って

きた。いよいよ頂上アタックの態勢が整いつつあった。

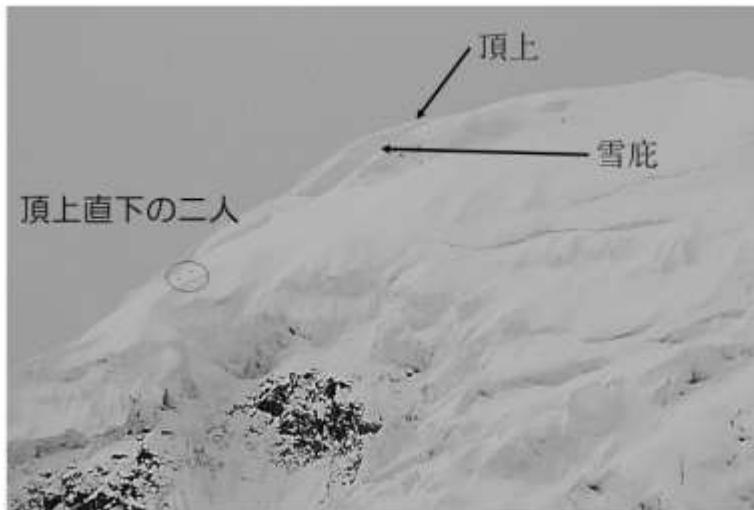
11月3日、全員がC1に集結し、明日からの頂上アタックの方法を協議した。中国側の意見では、C2・C3間が比較的短時間の行動となるので、天候が安定しているうちに日数をかけずにC2からの長駆アタックをしたいとのこと。しかし、C2から頂上までは標高差千m余り（このころはまだKG2の高さが6703mと推定していた）あり、疲労のたまっている日本側隊員は潰れる恐れがあることから、日本側は当初どおりC3を建設する方法を採りたい意向を伝えた。本来、日中合同登山であるので両国の混成アタック隊を出すのが望ましいが、それでは共倒れで失敗する可能性がある。結局、それぞれ自分たちに適したアタックをかけることで、どちらかが成功する確率を高めることにした。

11月4日、いよいよ頂上攻撃を始める。その朝は非常に美しい夜明けであった。2千m上空のKG2に陽が当たり始め、ヒマラヤ襞が花嫁のベールのように美しく輝く。満月がその右肩に沈もうとしている。C1では隊員が出発準備をしている。 ⇒ *pic.11「頂上へ向かう朝」*

日中それぞれのアタック隊、サポート隊がC2を目指して登っていった。この日、天候は非常に安定し、終日雲一つなかった。井上と山田は、2003年一度はねらったルオニイの登頂可能性を探るためにC1からアタ氷河をさらに遡り、別の角度から観察してみたが、やはりどの稜も危険性が極めて高いことを確認する結果となった。

5日の未明、天候はすばらしい。満月に照らされて午前4時にデチン、ダンタ、袁復棟、李生鵬、宋紅の5人がC2を出発した。C1から彼らのライトの灯りが確認できた。8時、夜が明けるころには高度6000mを突破し、6200m地点の急斜面にロープをフィックスした。10時、しばらく山陰に隠れていた5人が東南稜の上に5つの点となって再び現れた。稜上をじりじりと進んで

いくのが分かる。その頃から李、宋の疲労が激しく頂上到達が無理と判断され、袁が付き添って引き返すこととなった。デチンとダンタの二人は頂上に向かってさらに登り続ける。



頂上直下のデチンとダンタ (C1からの望遠写真)

正午ごろから頂上部に霧が掛かりはじめ、最後の雪庇の下で奮闘していた二人の姿が見えなくなる。まるで処女を奪われる恥じらいから霧のベールを纏ったようだ。C1 から双眼鏡で見ていた董范隊長が「加油、加油(がんばれ、がんばれ)」とつぶやいている。しばらくして、出し抜けにデチンの声がトランシーバーから聞こえた。中国語だ。井上が牛小洪に聞く。

「Already?」 「Yes!」

北京時間午後1時18分、デチンとダンタの2人はKG 2の頂上に、そして全カソリガルボの峰々の最初の頂に人類で初めて立った。C1 に待機してい

た全員が待ち望んだ歓喜の瞬間であった。董范と握手そして抱擁、その時彼の目に涙が光るのを見た。

この日、日本側は山本、矢崎、近藤、石丸の4人でC3 を建設し、第1アタックの矢崎、近藤が残り、山本、石丸は一旦 C2 へ引き返した。

6日、C2 ではテントがとばされそうな強風が吹き、6500m から上部には霧がまとわりついている。一度はC3 を出発した矢崎、近藤はすぐに引き返した。C2、C3 では食料が残り少なく、7日が最後のアタックチャンスと判断した。残念だが山本、石丸の頂上アタックはなくなった。このことをC1 から無線で告げると山本も同意してくれた。7日の中国側の予定は、デチン、ダンタ、李倫、袁復棟、張瑜の5人がC2 からアタックする予定となっていることから、C3 で矢崎、近藤と落ち合い7人で頂上アタックをかけることとした。なんとデチン、ダンタは再度のアタックである。

7日、日本側にとって運命の日、井上と山田は4時半には起きて、C1 のテントのなかでガスランプを灯した。東方に雲があるもののすばらしい星空だ。すでにC2 を出発した中国人5人のヘッドランプの灯りがC1 から見えた。C3 では矢崎と近藤がすでに3時半に起きて準備を整えていた。7時、C3 での合流が遅いと心配していたところ、C2 の山本から、5人の位置が6時頃から動いていないと伝えてきた。同時にデチンからC1 の董隊長に、隊員の一人（後で李倫とわかった）が脚を捻挫して登れない、全員で引き返すとの連絡が入った。C3 では矢崎、近藤が状況を知らずに彼らを待っていたので、思わず状況にあわてた。早く二人だけでアタックに出発するように伝えなければならない。7時の定時交信はすでに終わっていたので、次の8時まで待つことになるとアタックが時間切れになるかもしれない。C3 を呼び続け、ようやく7時半にC3 が応答した。状況を伝えすぐに出発するように指示する。明るくなった8時、二人がC3 を出発した。7人と2人ではラッセルのきつ

さは違う。初体験の高度で二人の体力が続くかどうか。ともかく、日本人登頂の夢は最後にこの2人に託された。

中国人たちは李倫をかばいながら、C2へ引き返し始めた。食料のことを考えると、李倫の足の状態が許せば、今日中にC1まで下ってくるだろう。山田は董と相談し、万一のことを考えてデチンとダンタをC2に待機させることにした。

矢崎、近藤は快調に登行を続けていた。サポートの山本と石丸は11時にC2を出発しC3へ向かった。アタックを開始して5時間、午後1時の交信のときに矢崎から、あと1時間くらいで登頂できそうだと言ってきた。引き返しのタイムリミットは3時と考えていたので、余裕がありそうだと喜んだ。ところが、雪庇の下の斜面で登行スピードががくんと落ちた。急斜面のうえ足元が固まらないさらさらの雪が深く、ラッセルに苦しんでいるようだ。そのうちに頂上部分に霧が掛かりはじめ2人が見えなくなる。



最後の斜面を登る近藤隊員

2時を過ぎ、今か今かと吉報を待っていたが連絡がない。タイムリミットの3時の交信で、C3に上がっていた山本から、引き返させましょうとの連絡。アタック隊に状況確認すると、近藤から、最後の雪庇の下にいて、あと15mくらいだ、疲労しているががんばりたい、と言ってきた。井上隊長があと30分だけがんばれと激励する。C2にいたデチンから、雪庇を右に抜けたところが頂上だと伝えてくる。

3時半、井上と山田が引き返させようと相談し、そろそろタイムリミットだと無線で伝えたとき、近藤から「雪庇の上に出た、ここが頂上でしょうか」と言ってきた。デチンの説明を聞いていた井上が、そこが頂上だと答えた。あとで考えると、その場所にいる近藤が、C1に尋ねるとはおかしな話だが、雪庇を乗り越えいきなり頂上に出たので、戸惑ったのだろう。

午後3時36分登頂。C1では日中の隊長、副隊長の4人が抱き合って喜んだ。しかし時間がなかった。いつでも連絡可能なようにトランシーバーをオープンにしたまま、直ちに下降に移るように指示した。矢崎が頂上で計測したGPSのデータは標高6805mを示していた。なんと、考えていた標高よりも高い。アタックに時間がかかった訳だ。



頂上の矢崎隊員

4時に霧の中、2人が下降を始める。5時に状況を確認すると、まだ雪庇の下の斜面にいる、矢崎の動きが鈍っているとの連絡が入る。高度による障害が出ているようだ。危険な状況にあると判断せざるを得ない。サポート隊がC2に引き返す時刻となっていたが、C3待機を指示した。

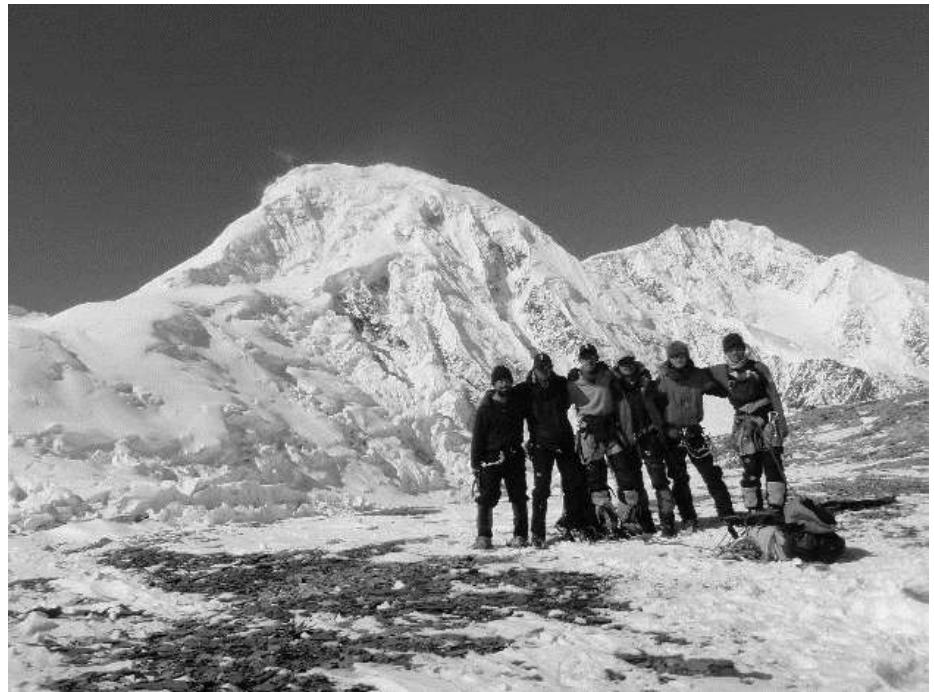
6時、下るにつれて酸素濃度が濃くなって、矢崎の調子は幾分回復したようだ。スピードが上がってきた。フィックスロープを張った危険地帯もなんとか下り終えるが、今度はルオニイテラスの広い雪原に霧がかかり、帰る方向がわかりにくくなってきた。登りのトレースは風で消され残っていないらしい。GPSを頼りに下っている。

7時、暗くなり始める。矢崎は足がもつれているとのこと。サポート隊もC3付近は吹雪で視界がなく闇雲に上部へ迎えにも行けずにいる。山本が近藤にツェルトを被って待機、何か食べるよう無線で指示する。

7時半ごろ、近藤から、霧が薄れてC3の灯りが見える、自力で降り始めるとの連絡が入る。石丸が持っていた強力ランタンが役に立った。C3から山本と石丸が登り始める。山本が近藤に、「灯りに向かって降りてこい」と無線で叫んでいる。

7時50分ごろ、山本からC1に、アタック隊と合流したと連絡が入る。C1では心配していた中国人も含めてようやくほっとする。日本語の通信がわからないC2のデチン達にも連絡する。8時、4人がC3帰着。12時間のアタックだった。C3は2人用テントなので、山本、石丸は座って夜を明かした。長い一日がようやく終わった。

8日には、彼ら4人はC3を撤収したあと、C2でデチン、ダンタと合流して6名が無事に下って来た。井上と山田は上部アイスフォールの手前まで迎えに登って行った。日本人4人は消耗しきった様子で昨日のアタックがいかに過酷だったかを伺い知ることができた。



C2で合流した日中の6人（バックはKG2とKG3）

9日にABCへ、10日には全員がBCへ帰着した。入山以来3週間ぶりのBC付近では雪や氷河の氷が融けてずいぶんと様子が変わっていた。翌11日、迎えに来たヤクとともにラグー集落へと下った。12日、思い出深いカンリガルポを離れる。その前にルオニイやKG2に別れを告げるために、それらを遠望できるザユール街道の高原へと登った。初冬の澄み切った青い空をバックにルオニイと、つい先日我々が初登頂したKG2が迎えてくれる。秋も深まつた高原は灌木が紅葉し草原が金色に染まる。ここはチベット高原の東南の片隅、広大な高原はここで尽き、カンリガルポの白い山々の向こう側は、

信じがたいことにアッサムの熱帯ジャングルへと続くのである。高原とジャングル、あまりにも違う二つの世界を隔てる偉大な山々である。そこに最初の足跡を残すことができたことに感謝の思いが溢れる。 ⇒ **pic.12/13「チベット高原の片隅にて」**

その日、ラサへの帰り道の途中で日没直前にセチ・ラに登り着いた。ナムチャバルワ（7782m）が東の方角に聳えていた。グレートヒマラヤの東端に君臨する巨大な山である。高距3千メートルにおよぶ西壁いっぱいに夕陽を浴びて輝いていた。まるで、我々を祝福し見送ってくれるように。

⇒ **pic.14「夕照のヒマラヤ」**

2009年の我々の登山を振り返ったとき、日本人の登頂は薄氷を踏むようなぎりぎりのところで成功したことがまず思い起こされる。隊員を6人しか揃えられなかった、それも50歳代以上が3人ということで、決して強力なパーティーではなかった。登頂できたことは多分に中国側に負うところが大きかったのである。特にチベット族の2人が常にリードしながら全隊を引っ張って行ってくれた。そのデチンとダンタが最初にチベットの未踏峰を踏んだことは喜ばしいことである。逆に、我々日本人の登山のペースが、高度順応ができる中国側によって乱されがちであったこと、中国側の荷揚げがあまり計画的でなく日本側がフォローをしなければならなかつたこと、特に上部キャンプで食料が不足して日本側から提供したということもあった。いずれにしても、単独チームでの登山とはひと味もふた味も違ったものを味わうことができた。

もう一つこの登山で思い起こされるのは、実にたくさんの方々からの支援をいただいたことである。登山許可取得の面では中国登山協会の全面的な支援が得られた。募金面では世の中の経済状況がよくない中、野上学長、福田

学長、大学当局、同窓会組織のご協力のもと、神戸大学卒業生の皆さんに多くのご寄付をいただいた。そして、神戸大学山岳会会員には準備段階からあらゆる方面で援助していただいた。これらの多くの方々の思いの結晶としてKG2初登頂があると思う。

カンリガルポその後

我々は、下山後KG2を「ロプチン」と名付け、チベット政府もそれを承認した。ロプチンの名付け親はラグー村長である。その意味は「雄鷹」であるという。また別の村人は「白い鳥の峰」と呼んでいるとの未確認な情報もあった。下山後、ザユールへの街道の高原から30kmを隔ててカンリガルポ主稜を遠望したが、この位置から見ると、ロプチンが鷹（白い鳥）の頭部で左右に広げた翼がルオニイとKG3というように見えなくもない。

2020年現在でも11年前の神戸大学・中国地質大学のロプチン登頂がカンリガルポ山群における唯一の登頂記録となっている。カンリガルポの登山許可を取得することは年々難しくなってきてている。これは前述したような国境問題に加えて民族紛争から人民解放軍が極度に外国人の立ち入りを制限しているためである。チベット民族と漢民族の対立の歴史のなかで、特に東チベットにおいて武力衝突が起こってきた。特に2008年3月に起こったラサの暴動は東チベット各地に飛び火した。東チベットは元々「カム地方」と呼ばれ、「カムバ」と呼ばれる比較的好戦的な性質を持つと言われる人々の国である。チベット政府でも人民解放軍でもそのようなセンシティブな場所に外国人の立ち入りを嫌うわけである。2009年は年々悪化する民族対立を考えれば許可のタイミングだったかもしれない。加えて中国地質大学との合同が無ければおそらく東チベット入域が許可されなかっただろう。

日中合同としたことにより、日中友好に資する社会的な意義も生み出され

た。しかもこの登山隊は、民族で言えば日本、漢、チベットの3民族合同である。参加した学生達は外国人とこれほど深い交流をしたのは初めてであった。おそらく驚きと相互理解の連続であったに違いない。チベット族のダンタがチベット仏教の死生観を熱く語るのを、日・漢の若者はどのように思つただろうか。現在、3民族はそれぞれ、尖閣諸島問題やダライラマ問題などで対立関係にある。これらの3民族の次世代を背負う若者が、育った環境や物事の考え方が全く異なる相手と文字通り同じ釜の飯を食って、ヒマラヤ登山という生死がかかったプロジェクトに取り組んだことは大変意義深いことであり、彼らにとって何ものにも代え難い貴重な経験となったに違いない。

学問や研究でも最初にその分野を切り開いていくことは、常に高い評価が与えられる。登山にしても同様であり、誰も行ったことがない山へ自分たちでルートを開拓し、そして初登頂するということは、それだけ困難が伴うが最も価値ある登山である。神戸大学山岳会はその考えのもとにパタゴニアやヒマラヤの初登頂を行ってきた。最近の登山界では登山時間や最高齢登頂などを競う風潮になって、パイオニアワークという言葉は死語になりつつあるようと思われる。確かにパイオニアワークを実践するフィールドは少なくなってきた。しかし、地球上にはカンリガルポのようなところがまだ残されているのである。



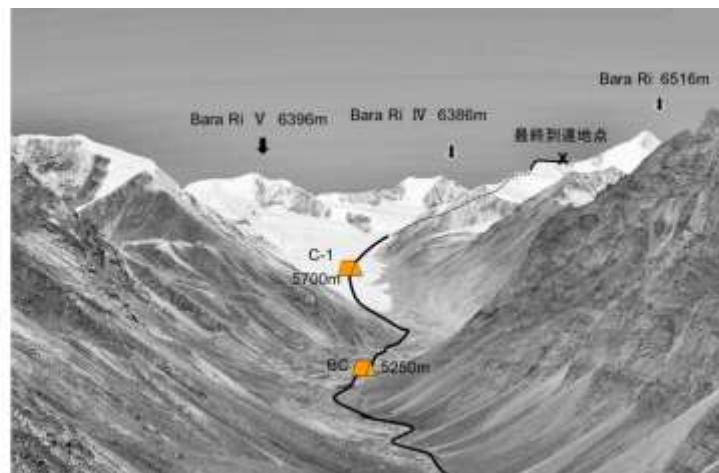
日焼け止めを塗りたくった張群と著者 ロブチン峰C1にて

ニエンチェンタンラ山群 バダリ峰

神戸大学の前身の神戸高商に山岳部ができたのは 1915 年である。日本の大学山岳部の中でも早い方である。創部百周年の記念の年である 2015 年に 3 つの記念事業を行うこととなった。山岳部百年史の編纂、氷ノ山千本杉ヒュッテの改修、そして未踏峰登山である。その未踏峰登山の目標となる山は、当初カンリガルポの別の山を希望したが、許可取得が難しくあきらめざるを得なかった。その後目標の山は二転三転したあと、結局ラサの西 100km にあるニエンチェンタンラ山群の未踏峰バダリ主峰 (6516m) に決まった。この百周年記念登山の許可を得るまでの交渉は今から振り返っても苦しいものだった。実行する時期が 2015 年と決められた中で、なかなか目標の山が決まらず、北京とラサに行って直接交渉も行った。決まったのは 2015 年 4 月、出発する半年前だった。この登山も中国地質大学との合同登山となった。



10 月 6 日、登山隊 7 人は日本を出発した。ラサにて食料などの買い出しを行って、10 月 16 日、ラサから西へ 100km、ニエンチェンタンラ山群のバダ谷の入り口に仮ベースキャンプ (4800m) を設けた。中国地質大学のメンバー（董范、牛小洪、デチンら 9 名）は遅れてチベットに来るので、日本側はここで高度順化を行った。18 日に中国側が到着したので、翌 19 日ベースキャンプ (5250m) へと向かった。ベースキャンプへはヤクの放牧道をバダ谷に沿って遡る。ベースキャンプまで半分くらいの所で昔氷河が運んできたモレーン（堆石）が現れ、その上に出ると広大な砂地がひろがる氷河湖跡があった。そこには以前モレーンでせき止められた湖があつたらしく、その湖に堆積した砂と思われる。モレーンが崩れて水が流出してしまい、砂地が現れているのである。その氷河湖跡を過ぎると、見事な U 字谷となり、赤くなつた草紅葉の上にところどころに氷河が運んできた迷子岩が点在する、まるで庭園のような美しい場所となる。谷の奥には氷河を懸けたバダリ V 峰が覗いている。この時の情景が *pic.15 「バダ谷にて」* である。



バダ谷とバダリ主峰（右）

バダリ主峰の登山は10月27日、第1キャンプ(5700m)から日中の6隊員がアタックを行った。しかし、頂上まで高さにしてあと180mという地点で、ルート上に不安定な岩塊が積み上った危険箇所に行きあたってしまった。取り付いてみたが、危険極まりないということで、あきらめざるを得なかった。登山許可のために走り回った2年間の努力の末にやっと実行した百周年記念登山はまことにあっけなく終わってしまった。私にとっては登山中の体調も良くなく、苦しくつらい思い出の山である。



ベースキャンプにて日中全隊員



ナム湖に居た白いヤク

ネパールヒマラヤ

1998年11月にネパールを訪れる機会があった。それ以前からHNA(Help Nepal Association)というNPO法人の会員となっていた。このNPO法人はネパールの各地の小学校に校舎を建てる資金の援助をする目的で、神戸大学山岳会のメンバーを中心となって活動している。ヒマラヤの北側のチベットに行ったので次は南側のネパールを訪れたいと思っていたところ、ちょうどHNAが補助した小学校の校舎が完成したというので、それを確認しに行くことになった。そのついでにトレッキングもすることにした。

その小学校はポカラの近くということなので、そこを起点とするトレッキングを考えた結果、アンナプルナやダウラギリを眺められるゴラパニを訪ることとした。同じ職場の2人が行きたいとのことだったので同行者となつた。

訪れたアルチャルボット小学校はポカラの街から丘陵地に入ったところの段々畑の中にあった。全く予期していなかったことに、全校生徒、全先生たち、大勢の保護者に出迎えられた。外国人の資金提供者がこの地を訪問することは学校の一大イベントなのだろう。そして大歓迎会が始まった。当然の成り行きで訪問者を代表して演説をぶつ羽目になった。通訳が二人、日本語→英語、英語→ネパール語に翻訳して伝えるのだが、本当に伝わっているのか怪しいところである。持参したノートと鉛筆を一人一人子供達に配った。職場に入りしていた文房具屋に寄付してもらった在庫品である。ネパールの子供はインド系、チベット系の顔つきをしている子が多いが、中には明らかに髪や肌の色から西洋系の子供も混じっている。ネパール・インドの歴史からいろんな民族がまじりあったものであろうと想像できる。ほとんどの子供は裸足であった。このあと茶話会になり、いつ終わったかわからないうち

に子供と保護者が三々五々、段々畑の中を家路につく。遠くにはマナスル三山が夕日にかすんでいる。帰っていく親子の姿は貧しいけれども幸福そのものに見えた。



無事小学校訪問を終えた我々は、ガイド、ポーターの二人を加えてトレッキングに向かった。ポカラからバスでナヤブルまで行き、そこからいよいよ歩いてゴラパニを目指す。ナヤブルからゴラパニへはモディ・コーラ（「コーラ」は川の意）の支流に沿って道が付いている。このトレッキング道は住民にとっては生活道路で、生活物資が人やロバに背負われて行き来する。トレッカーも多く、沿道には茶店やロッジが至る所にある。丸1日をかけて山腹の村のウーレリに到着する。ここからは正面にアンナプルナサウス(7219m)がよく見える。翌日、半日登るとゴラパニの集落に着いた。集落はモディ・コーラとカリガンダキ河との分水嶺上にある。カリガンダキ側を覗くと白いダウラギリ(8167m)世界第7位の巨峰が見えた。ゴラパニのロッジで夕方

になるのを待つ。集落から 30 分ほど稜線を登ったところにポーンヒルという見晴らしの良い小さな丘があるので、アーベントロートを見るために登つて行った。草原のポーンヒルからは東にマチャプチャレ (6993m)、北にはアンナプルナサウスとこれまで見えなかったアンナプルナ主峰 (8091m)、西にはダウラギリ連山が望める。素晴らしい展望台である。だんだんと陽が傾き、周りの空気も変わってきた。今日最後の陽が真横から差し、ここより低いカリガンダキ河の谷間は深い夜の帳に覆われようとしているが、8千mを超えるダウラギリはまだまだ夕陽を受けて輝いている。その光景を描いたのが *pic.16 「ゴラパニ峠からのダウラギリ峰夕照」* である。日本では到底見ることのできない雄大な展望であるが、ネパールの村人にとってここは日常生活の場である。そのことを表現したくて、荷物を背負って家路を急ぐ婦人を画に加えてみた。

さて、我々は日数の関係があってゴラパニからガンドルンを経由して二日後にはポカラに戻ったのであるが、自分として本当は反対側のカリガンダキに下り、ヒマラヤの大障壁を越えてジョムソムまで訪れたかった。しかしその時は果たせなかった。この数年後、見ることができなかつたジョムソム付近からのニルギリ (7061m) の写真を見つけた。大障壁を形成するニルギリ北面の素晴らしい高度感が出ていた。ちょうどそのころ油絵でヒマラヤを描きたいと考えていた頃だったので、練習と思ってその写真を油絵に起こした。それが、*pic.17 「カリガンダキ川から仰ぐヒマラヤ大障壁」* である。つまりこの画がヒマラヤの山を描いた最初の一枚であり、この画集で唯一現地に行っていながらもかかわらず描いた一枚である。本来、風景画を描くためには現地に行き、周り 360 度を見渡し、何かに感動したうえで、それをキャンバスに表現するというのがあるべき姿だろう。現地を見ないで描くのは邪道である、長尾和先生もそう言っておられた。しかし、その邪道ともいえる 1

枚をこの画集に加えたのは、ある展覧会でこの画が初めて賞をいただいた記念すべき 1 枚だからである。現地を訪問しないで描いた画が入選するというのはちょっとした皮肉であるが、評には空気感、高度感が出ているとあった。以上のような理由でこの 1 枚を画集に加えた。いつかは現地を訪れたいと思っている。



アルチャルボット小学校の子供たち

梅里雪山 カワカブ峰

中国雲南省とチベット自治区の境にある山域「梅里雪山」はある意味ヒマラヤの東における特異な存在である。チベット仏教の著名な聖山であり、西のカイラスと並び称されている。この山の周囲は巡礼路となっており、一周300kmを多くのラマ教巡礼者が五体投地をしながら何日もかけて廻っている。また、梅里雪山のある地域は世界自然遺産になっている三江（サルヴィーン、メコン、長江）併流地域に属し、豪雪の気候、地形の急峻さにおいて他に類を見ない自然環境の厳しいところである。この梅里雪山の最高峰であるカワカブ峰(6740m)の東面は深く切れ込んでいて、頂上からメコン河畔まで4700mの高度差があり、有名な明永氷河が滝のように懸かっている。20世紀初頭に東チベットを探検した英国のプラントハンター、キングドンウォードがこの地域を「深い浸食の国 (The Land of Deep Corrosions)」と形容したのも頷ける。

このカワカブの初登頂を目指して1990年暮れから1991年にかけて京都大学学士山岳会が登山隊を送った。この強力な登山隊は頂上間近まで迫ったが、1991年1月3日深夜または4日未明、カワカブの頂上稜線から明永氷河へ向かって大雪崩が発生し、ほとんどの登山隊員が集結していた第3キャンプを埋め尽くし、その場にいた日本人中国人17人全員が遭難するというヒマラヤ登山史上最大の悲劇が起った。その17人のうちの一人が、クーラカンリで一緒に登った船原尚武君であった。彼はクーラカンリとチェルー山の経験を買わせて神戸大学山岳会から一人この登山隊に参加していた。

1月4日以降、第3キャンプからの連絡が途絶えた。待機していたベースキャンプでは何が起こったかわからなかった。ようやく9日になって人民解放軍が飛行機を飛ばして雪崩の痕跡を発見した。中国登山協会の搜索隊が北

京から出発した。船原君とクーラカンリへ一緒に行った李致新と王勇峰の二人も搜索隊員として真っ先に駆けつけてくれた。しかし、気象条件が極端に悪く搜索隊は第3キャンプにすら到達できず搜索は打ち切られた。

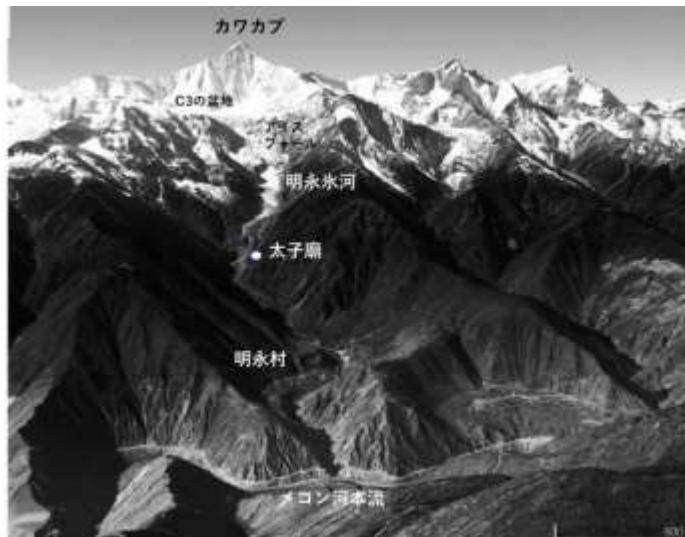
その後、京都大学学士山岳会ではカワカブ初登頂を目指して1996年に再度登山隊を送ったが、その時もルートが危険すぎることで断念された。また、地元の住民の間で、神の山を犯した登山隊に天罰が下ったとの噂が広まり、再度の登山への猛抗議もあったことからそれ以降、この山を目指す者はいなくなった。

しかし遭難から7年経った1998年7月、遭難現場の下流にあたる明永氷河で遭難者の遺体・遺品が発見されるというショッキングなニュースがもたらされた。遭難現場の第3キャンプは頂上東側の標高5100m付近の盆地のようなところである。カワカブの東面の高さ千数百mに及ぶ壁からの雪崩がこの盆地で集められ、膨大な氷が盆地の唯一の出口である明永氷河から溢れ出し落差千m以上ものアイスフォールとなって流れ落ちている。その明永氷河の標高3600m付近のクレバスの中から多くの遺品とともに遺体の一部が明永村の村人によって発見されたのである。

最初の発見以降、毎年の雪融け時期に京都大学学士山岳会の人たちが現地に赴き、少しづつ遺体と遺品が回収されていった。船原君の遺体も遭難から11年経った2002年8月に発見されご遺族に引き渡された。くるまれていた寝袋のネームにより彼であることが判明した。奇跡的に損傷の少ない状態であったという。この遭難のいきさつと遺体捜索については京都大学学士山岳会の小林尚礼氏の著書「梅里雪山 十七人の友を探して」に詳しい。

クーラカンリの友である船原君の靈を弔うために、現地の明永村にある慰靈碑を訪れたいと長年考えていたが果たせずにいた。2007年のカンリガルポ偵察時に梅里雪山に近いシャングリラの街からカンリガルポを目

指したが、この時には道路の土砂崩れや大雪のため、行きも帰りも梅里雪山に近づくことができなかった。ようやく 2016 年、クーラカンリ登頂 30 周年の祝賀会を北京で行った後、平井一正先生や居谷千春先輩らとともに明永氷河を訪れることができた。11 月、シャングリラからマイクロバスに乗って丸 1 日、飛来寺というところでカワカブと対峙した。ここはメコン河をはさんで正面にカワカブが望める絶好の展望台である。カワカブの白い三角錐が気持ちいいくらいのシャープさで天を突いている。その神々しい姿から、チベットの人々が神の山と崇める気持ちがよくわかる。



翌朝、夜明け前から待機し朝日に輝くカワカブを待った。若干雲が多く、モルゲンロートの鮮やかさはさほどでもなかったが、オレンジ色に染まったカワカブとそれに続く連山が見えた。その光景を描いたのが **pic.18 「チベ**

ットの神山に祈る」 である。実際見た光景よりも雲を少なくしてモルゲンロートを鮮やかにしてみた。カワカブの懷に包まれるように、第 3 キャンプのあった盆地が見える。そこからの唯一の出口、まるでロートの口のようなところから溢れ出す明永氷河のアイスフォールもはっきりと見えた。

山稜上にある飛来寺から対岸の明永村を目指して、深く浸食されたメコンへと下っていく。メコンはここから下流へ約 3 千 km、ラオス、タイ、カンボジアを経てベトナムで南シナ海に注ぐ。反対にここから上流約 150km の如美というところでラサ・成都間を結ぶ川蔵公路が横切っており、クーラカンリからの帰りとカンリガルポ偵察の時にそこを通過している。如美でもそうだったが、本流沿いは乾燥した風が吹き抜けるためか草木が極端に少なく、岩肌が露出した無味乾燥な不毛の土地が続く。メコン本流を橋で渡って対岸の明永谷に入していく。この谷の上流に明永村がありさらにその上流は明永氷河である。支流の明永谷に入ると、乾燥した風を山襞が遮っていることと、豊富な明永谷の水量に支えられて、実に緑濃い穏やかな地となる。ここへ来てみると、明永村は農業が盛んで裕福な村であることは一目見て理解ができる。その裕福さを支えているのがカワカブに降った雪である。カワカブからの雪、氷河、谷水が、如何にこの村に富をもたらしているかがわかる。村人にとってカワカブはまさに神の山である。その山に登ろうとした登山隊は神の怒りに触れて遭難したのである、もう二度と神の山に登るような企てはやめてほしい、というのが村人の想いであろう。

村を通り過ぎたところに、樹下にひっそりと 17 人の慰靈碑が建っていた。知っている者が教えてくれないとそこにあるのがわからないような場所だった。遭難が起こったことは、地元の人たちにとって思い出したくない事柄なのかもしれない。そのため、目立たない場所に慰靈碑が建てられているのだろうか。私たちは、ご両親から預かってきた船原君の遺影を飾り、線香を

あげ般若心経を詠んだ。ようやく長年の念願を果たすことができた。



17人の慰靈碑「中日17名登山勇士 在此長眠」

その後、明永氷河の遺体発見場所が間近に見える太子廟に登った。太子廟は村人がお参りしに行く場所で、ラマ僧が一人住んでいるそうだ。以前は歩いて、または馬に乗ってお参りしていたようだが、最近、明永氷河を見物する観光客が増えて、村はずれから太子廟への途中まで電気自動車が運転されている。森の中に付けられた狭い道路を電気自動車で30分ほど揺られて終点、ここから徒歩で約1時間登ると、明永氷河左岸に建つ太子廟に到着する。あたりは疎林となり、タルチョが風にたなびいている場所を抜けると、ひつそりと太子廟の建物が建っていた。建物を囲む土塀はところどころ崩れており、山奥にある世間から忘れられた寺といった風情である。建物の背後には驚くようなボリュームで薄汚れた氷河の末端が迫っている。氷河の上流を見

上げると、第3キャンプの盆地に集められた氷が溢れ出すロートの口が見え、さらにはるかな高み、雲の切れ間にカワカブのあの丸い特徴的な頂上が仰げた。この時の光景を描いたのが *pic.19 「明永氷河・太子廟にて」* である。遺体や遺品が次々と発見されたのは、向かって右よりに流れてきた氷河が屈曲して左よりに方向を変える付近から下流のあたりである。ロートの口からはきだされ、このずたずたに割れた膨大な氷の中を17人は落下してきたのである。大自然の破壊的な力と非情さを感じる場所であった。

飛来寺を去る日に、それまで雲に覆われて見えなかったメツモ峰(6054m)が姿を現した。現地の人たちはカワカブを男神と見立てて、その妃の峰とされている。凛として鋭く天を突くように立っている姿は気品さえ感じさせる素晴らしい山である。まさに秀麗。 ⇒ *pic.20 「秀麗」*



左から船原尚武、王勇峰、山田健（著者）、李致新 クーラカンリ C2にて

ジャラリ（雀児山）

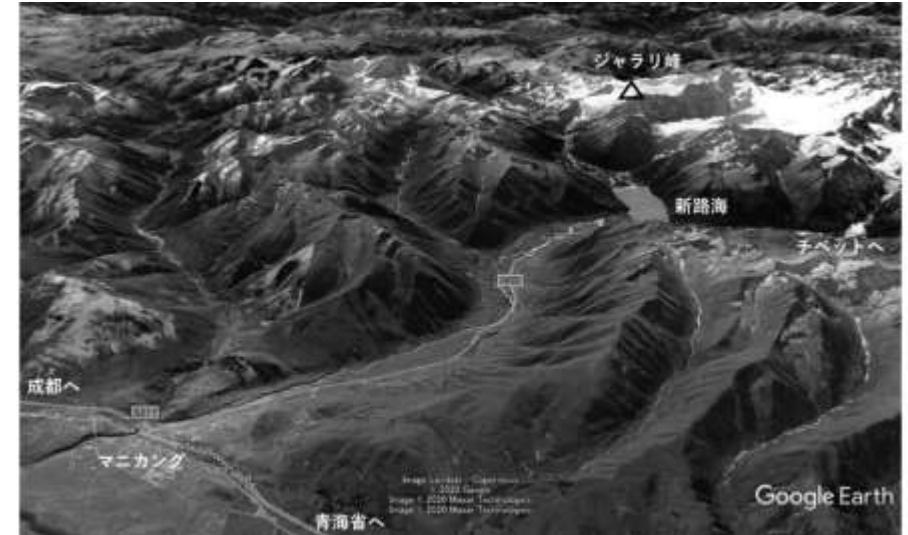
ジャラリ（6168m）は中国四川省の北西地域にある高峰である。地元の漢人たちは「チヨラサン」と呼んでいる。チベットの呼び名「ジャラ」の漢字の当て字を「雀児」としたため、四川方面での発音「チヨラ」となったのだろう。最後の「リ」はチベット語で「山」という意味なので「サン」である。ちなみに北京語では「チェルーシャン」となる。

この山は神戸大学山岳会と中国地質大学の合同隊が1988年に初登頂した山である。中国地質大学はクーラカンリで高所協力員だった5人の出身大学であり、その縁で合同登山を行うことになった。その大学では、中国では珍しく登山の課外活動を行っていた。後年、ロプチンやバダリに一緒に行くこととなった中国地質大学との初の合同登山であった。カワカブに散った船原君はこの登山隊に参加して、初登頂の原動力となる素晴らしい働きをした。学生主体であったこの登山隊には私は参加していなかったが、初登頂30周年の2018年9月にその麓を訪れることができた。

成都からランドクルーザーを使ってわずか2日半で最終の街であるマニカングに到着した。30年前には道路事情が悪く1週間もかかった道のりである。四川省北西部の中心地ギャンツェ（甘孜）の手前からずっと美しい草原が続いている。川蔵公路の理塘高原をはじめ四川省西部には至る所に美しい草原が広がっている。ここマニカングの町も周囲は起伏のある草原に囲まれた鄙びた街である。ここから北西に行けば青海省方面、南西に向かえばチベット方面へ行く分岐点となっている。街を出て、チベット方面への道を走ると、突然草原から湧き出たような巨大な氷河を懸けた岩山が見えた。こんなに早くお目にかかるとは予期していなかったので、これが雀児山であるとすぐにはわからなかった。雲が多かったので最初は判然としなかったが、

雪を被った頂上も前衛峰の岩壁の右にちょこんと見えている。圧倒的な岩壁と懸垂氷河に守られて、難攻不落の要塞のように思えた。山岳部の後輩たちはよくこの山に初登頂したものである。 ⇒ *pic.21 「草原の果てのジャラリ」*

草原の中を山に近づいていくと、氷河が作った湖「新路海」の畔に出た。標高4千m、湖畔を山にむかってトレッキングをしていく。近づけば近づくほどその岩山の巨大さが実感できた。新路海にいたチベット老人に「あの山はなんと呼ぶか？」と尋ねると、誇らしく「ジャラリ！」の返答。30年間、その名を「チェルーシャン」と覚えていた山、その時この名峰のチベット世界における真の呼び名を知った。



ヨーロッパアルプス

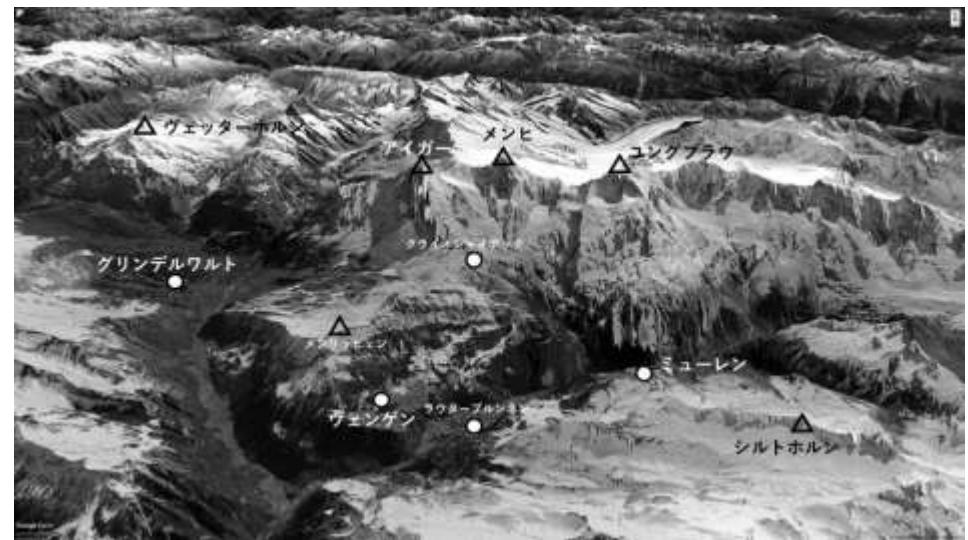
過去2回、スイスを中心にヨーロッパアルプスを訪問した。どちらも登山ではなく、妻との観光が目的であった。ヨーロッパアルプスは文句なく美しい。岩山と氷河、森とアルプ、それにカラフルな建築物など、どこを見ても画になる風景があふれている。そこはヒマラヤやカラコルムのように荒れ果て無味乾燥な不毛の土地ではない。空の青、雪の白、岩山のグレー、森や草原の緑、高山植物の赤や黄色と実に色彩が豊かである。それにスイスではあらゆるところに赤地に白十字の鮮やかな国旗が立っている。大自然の中でこの国旗の色は実に映えるのである。これを画のポイントとして大いに使わせてもらった。

主題の山々は私にとって子供の頃から書物や写真で見慣れた山々で、初めて实物を見たにもかかわらず、昔から身近に親しんできたように思えた。最高峰のモンブラン、北壁で有名なアイガーやグランドジョラス、そして誰でも写真で知っているマッターホルンなどなど、どれもこれも個性的なピークが居並ぶ。しかもそれぞれが比較的近接しているので、移動も楽だし短時間でたくさんの山と接することができる。絵描きにとってはまことに理想的な場所である。こうしてせっせと何枚も描いてしまうのである。

最初に行ったのは、2006年の5月初旬。アルプスではこの時期はスキーシーズンと夏山シーズンのはざまになっていて比較的人は少ない。ただしGWなので例外的に日本人が多い。ロープウェイも点検のため休止していることがあった。しかし、山々には適度に残雪があり、2回目に行った6月のハイシーズンと比べるとより清浄で美しく感じた。

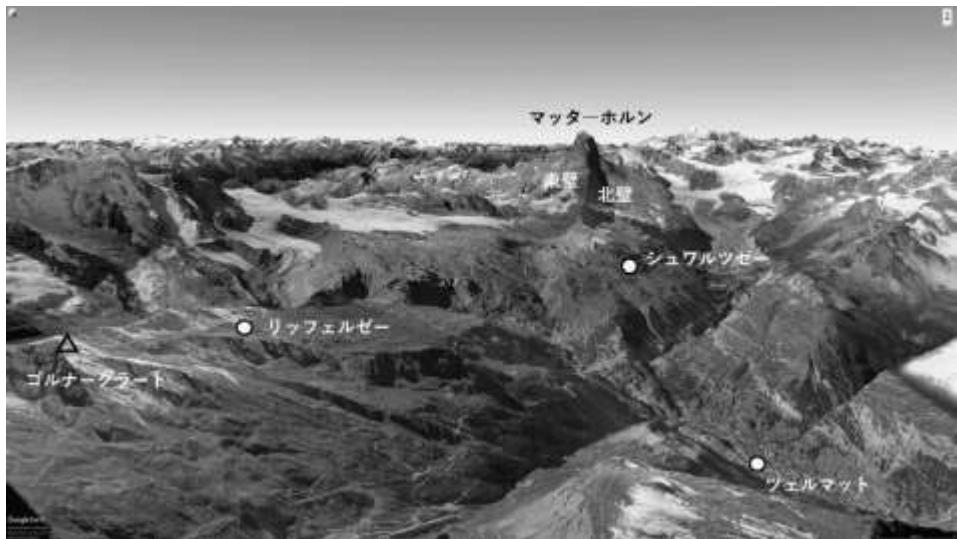
最初に入ったのがスイス中央部のベルナーオーバーランドのグリンデルワルト村。その名の通り草原の中に家々が点在する「緑の谷」である。アイ

ガーはここからは北東壁が正面に見え、その左に1921年、楨有恒氏が初登攀したミッテルレギ山稜が空を画している。有名なアイガーヴァント（北壁）は北東壁の右側に見え隠れしている。しかしグリンデルワルトにおいて圧倒的な存在感を与えてるのはむしろヴェッターホルン（3701m）である。その山は村の東にまるで頭上にのしかかるように聳えている。垂直の北壁の上に頭をもたげたような頂上岩峰が見え、一度見ると忘れられない個性的な姿である。この北壁には、1953年から1962年まで神戸大学山岳部長でおられた高木正孝先生が1945年夏、留学先のドイツからスイスに避難しているときに登攀している。グリンデルワルトのメインストリートをホテルから駅の方へと歩いているとき、振り返るとヴェッターホルンが圧倒するように聳えていた。 ⇒ *pic.22 「グリンデルワルトにて」*



その後グリンデルワルトからヴァリス地方のツェルマットに移動。そこで滞在時間が短かったこともあり、ゴルナーグラート展望台の訪問だけとな

ったが、天候は上々、登山電車で登っていくと辺りは雪原となり、美しい三角錐のマッターホルン（4478m）が手に取るように見えた。この時期は残雪が豊富で、東壁やその下の氷河も清浄な白い雪で覆われている。もう少し季節が進むと表面の雪が融けて、氷河の上に乗った岩くずが出てきて薄汚れたような印象になってしまう。白い美しいマッターホルンを見るにはこの時期がベストだと思う。それにしても写真で何度見たことだろう。まさに世界の名峰と呼べる山である。 ⇒ *pic.23 「ゴルナーグラート駅からのマッターホルン」*



最後にスイスからフランスに越境してシャモニーの街へ向かった。エギュ・ド・ミディの展望台に上がったが、残念ながら天候が悪化し、期待していたモンブランもグランドジョラスも霧に隠れて見えずじまいだった。この時の悔しさもあって11年後に再度のアルプス訪問につながった。

2度目は2017年の6月に訪問した。アルプス観光の最盛期に入ろうとしている時期なので、前回と比べて人は多かった。しかし、天候にも恵まれ、高山植物が豊富な時期で美しい花々が至る所で見られ、ヨーロッパアルプスを満喫することができた。

まずイタリアのミラノからバスでスイス国境のテラーノに行き、そこから世界遺産になっているレーテッシュ鉄道に乗ってスイス東部のサンモリツに向かった。国境を越えてどんどんと高度を上げていくと、やがて車窓にピッツパリュ（3905m）南面の息をのむような美しい景色が広がった。この絶景を予想していなかったのでびっくり、放心したように見入ってしまった。遙か上に広がるパリュ氷河からの融水が、岩壁を幾条もの滝となって落下し森を縫って流れたのちに、なんとも美しいコバルトグリーンの池（ラゴ・デ・パリュ）に流れ込んでいる。まさに絵のような景色が広がった。

⇒ *pic.24 「ピッツパリュ」*

サンモリツからスイス中央部のベルナーオーバーランドに移動して、アイガー、メンヒ、ユングフラウなど前回におなじみになった山々に再会した。見事なU字谷の底にあるラウターブルンネンから登山電車に乗って中腹にあるヴェンゲンの村に入った。グリンデルワルトとはメンリッヒエンの尾根を隔てて反対側（西側）にあたる。ヴェンゲンの村の背後にはユングフラウ（4158m）が聳え、朝夕には見事に陽に映えて美しい。この季節は夜9時を過ぎても陽が沈まない。ホテルで夕食を摂ってから、ガイドから教えられた村はずれの教会へ出かけた。そこからはアーベントロートに染まる雄大なユングフラウを見ることができた。 ⇒ *pic.25 「残照のユングフラウ」*

翌朝、尾根の西側にあるヴェンゲンでは遅くまで陽が当たらない。森の中

にあるので余計に暗いが、背後にそそり立つユングフラウにはすでに朝の光が燐燐と降り注ぎ、眩しいまでに輝いていた。 ⇒ *pic.26 「ヴェンゲンの朝」*

ヴェンゲンから午前中はシルトホルン展望台に登り、午後からメンリッヒエンからクライネシャイデックへのトレッキングへ行った。シルトホルンへは一度ラウターブルンネンに下り、U字谷の反対側の尾根に、全部で4つのロープウェイを乗り継いでいく。2つ目のロープウェイでU字谷の側壁を登ったところがミューレンである。ここから見上げるアイガー(3970m)は迫力がある。アイガーという山は東西に延びたナイフのような山容である。ミューレンからはこの山を西から見ることになるので、鋭くとがって見える。また、午前中だったので逆光となり一層迫力が増して見えた。この峠々たる山々のなか、よく見るとU字谷対岸の岩壁の間近にパラグライダーが気持ちよさそうに舞っていた。 ⇒ *pic.27 「ミューレンから仰ぐアイガー」*

午後からヴェンゲンに戻り、ロープウェイでメンリッヒエンに登った。メンリッヒエンの尾根上に出ると反対側のグリンデルワルトの村を見下ろせる。村の後ろには懐かしいヴェッターホルンがデンと控えている。グリンデルワルトの右にはアイガーが北壁を正面にして見慣れた姿で聳え、さらに右にメンヒ(4107m)とユングフラウが並んでいる。午前中に行ったシルトホルンも見える。360度素晴らしい景色が広がる展望台である。メンリッヒエンからアイガー北壁の基部にあるクライネシャイデックへとハイキング道を辿っていく。この道はアルペンローズなど、実に高山植物が豊富で楽しい道である。 ⇒ *pic.28 「メンリッヒエンからのアイガーとメンヒ」*

クライネシャイデックに近づくと、高さ 1500m のアイガー北壁が圧倒す

るよう頭上に聳えている。北壁最上部の有名な「白い蜘蛛」と呼ばれている雪壁もよく見える。周りにクモの巣を張った白い蜘蛛が黒い岩にはめ込まれたように見えることからその名がついている。北壁登攀の最後の難所で、多くのクライマーがここで落命していることから、蜘蛛がクライマーを絡めると恐れられたそうだ。

ヴェンゲンを後にしてベルンからレマン湖畔を通りツェルマットへ移動し夕刻着いた。前回はここで宿泊することなく滞在時間が短かったが、今回は2泊した。翌朝、起きたときにはマッターホルンにはガスがまとわりついて頂上は見えなかったが、朝食後、外に出るとようやくガスが晴れて見事な山容を見る事ができた。ここはアルプス観光の中心地である。観光客がそれぞれの目的地に向かって出発していく。町が活気づいてきた。

⇒ *pic.29 「朝のツェルマット」*

前回と同様にゴルナーグラートへ登山電車で登った。そこからは、モンテローザ氷河を前にしたデフュールシュピッツェ (4634m) やリスカム (4527m) が特に美しかった。帰りにローテンボーデン駅で途中下車し、リッフェルベルク駅まで一駅間のトレッキングをした。ローテンボーデンから少し下るとリッフェルゼーを見下ろすことができた。 ⇒ *pic.30 「リッフェルゼーにて」*

この池は逆さマッターホルンが見られることで有名な池であるが、風が強いと水面が波立って映らない。この時は、風はなかったがなんと犬が泳いでいたため波立っていた。その後、ツェルマットに戻ってからシュワルツゼーに登ったが、マッターホルンが近すぎてその迫力を画にすることが難しく、いまだに描けていない。

最後に向かったのが、前回、何も見えなかったシャモニである。ツェルマットを出発するときに雨が降っていたので今回もダメかと思ったが、フランスに国境を越えるころに薄明るくなり、ガスの中からシャモニ針峰群やドリュの岩峰が見え始めた。やがてシャモニの街に到着するころにはすっかりと青空になった。なんと幸運なことか。ロープウェイに乗ってエギュ・ド・ミディ (3824m) の絶頂に立つと、真っ青な空をバックに目が痛いほど白く輝くモンブランが間近に望めた。登山者が何組か登って行くのも見える。南側のバレ・ブランシュ側に出ると待望のグランドジョラス (4208m) が眺められた。アイガー、マッターホルンと並んでアルプス3大北壁と呼ばれるグランドジョラス北壁・ウォーカーバットレスが、頂上から左側に薙ぎおちている。その灰色の岩稜の傾斜はとても人間が登れるとは思えない。 ⇒

pic.31 「ミディイからのグランドジョラス」



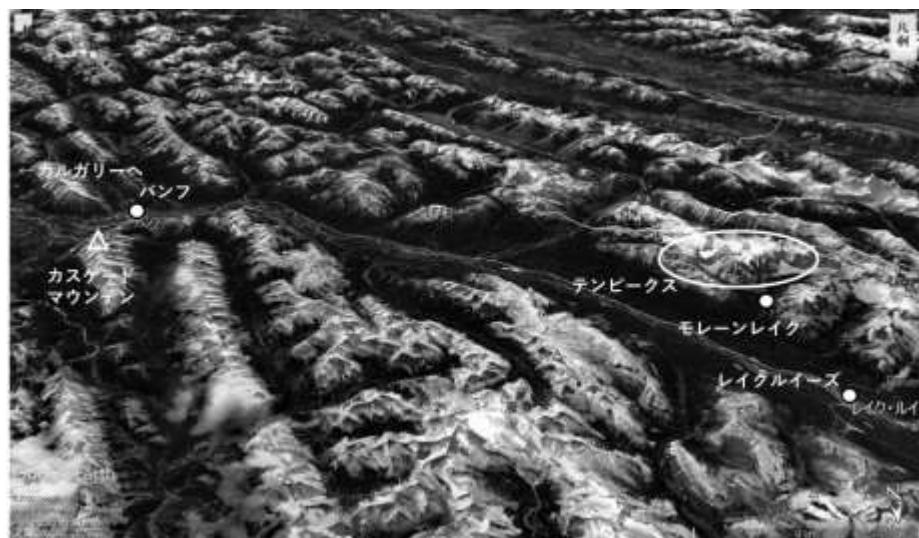
ミディイからは名物の3連ゴンドラに乗ってイタリア国境のポワン・ド・エルブロンヌの展望台へ。バレ・ブランシュの大氷河の上空を横切るゴンドラからは、ガスが時折去来し、周りの景色と相まって夢の中をさまよっているようだ。事実、ゴンドラの同乗者は「あの世に来たみたい」と言っていた。エルブロンヌから見るモンブランのイタリア側（むしろイタリア名の「モンテビアンコ」と言うべきか）は、比較的に茫茫とした氷河が続くフランス側と打って変わって荒々しい岩壁が一気に落ちている。岩壁の上にそこだけ聖地の如く清浄な純白のドームが雪煙をたなびかせている。ヨーロッパアルプス最高地点・モンブラン頂上 4810m である。 ⇒ *pic.32 「エルブロンヌからのモンブラン・イタリア側」*

ベルンにて



カナダ

カナダを訪れたのは 2010 年の秋である。カナディアンロッキーには新婚旅行の時から 27 年ぶりの妻との再訪である。カルガリーからバスでバンフの街に入る。夕方、街を散歩する。前回はバンクーバーから大陸横断鉄道のブルートレインに乗ってここに着いた。その小さなバンフ駅に立ち寄った後、バンフスプリングスに向かってメインストリートを歩く。道に面したレストランや土産物店にはすでに灯りがともる。振り返ると見覚えのある形のカスケードマウンテン (2998m) が夕陽を浴びてオレンジ色に光っていた。街の様子は 27 年前の記憶があいまいでよく覚えていなかったが、カスケードマウンテンだけはその記憶が鮮やかによみがえった。 ⇒ *pic.33 「バンフの夕暮れ」*



バンフからレイクルイーズに向かう途中にあるモレーンレイクを訪れた。雪が残るため、この時期の短い間だけ訪れるができる氷河湖である。その周りはテンピークスと呼ばれている 10 個の岩山が取り囲んで、鮮やかな青色の湖面にその影を映している。このテンピークスもそうだが、ロッキー山脈の山々はどれも堆積岩の地層が水平の美しい縞模様を見せており、ヒマラヤやアルプスも堆積岩であるがロッキーほど縞模様が顕著ではない。岩質により斜面の傾斜が変化するために、地層の変わり目に水平の線状に雪が残る。ロッキー・マウンテンズの特徴であろう。

モレーンレイクには朝いちばんに行ったおかげで、人は誰もいない。澄み切った空にどこまでも静まりかえた空間はとても気持ちの良い時間を与えてくれた。 ⇒ *pic.34 「モレーンレイクとテンピークス」*

再びカルガリーに戻った後、カナダ東部へ移動した。ナイアガラ瀑布やオンタリオ湖を観光した後、モントリオールまで大陸横断鉄道に乗って、紅葉が美しいローレンシャン高原を訪れた。冬はスキーリゾートになるトレントランは、紅葉の盛りを少し過ぎたと地元の人は言っていたが、それでも十分に見事であった。オレンジ、赤、黄、黄緑と色とりどりの木々が入り混じるさまは日本の紅葉と少し違うように思えた。まるで遊園地かおとぎの国のようなホテル街から、その背後のトレントラン山(875m)へスキーリフトで登ると、カナダの大自然林が果てしなく広がっていた。下山後、麓に見えた人造湖に行くと、リゾート地らしく多くのヨットが繫留されていた。湖から見る秋のトレントラン山はまことに豪華な錦繡に包まれていた。 ⇒ *pic.35 「トレントラン山の秋」*

サザンアルプス

ニュージーランドには手つかずの自然が多く残されている。他の陸地から海により遠く隔絶されたこの島には哺乳類が全くいなかったという。しかし、人間が持ち込んだ動物により絶滅した種も少なくない。その代表的なものが、飛べない鳥の一種「モア」である。3m以上にもなったそうだ。同じ飛べない鳥のキーウィも絶滅危惧種になっている。このように貴重な自然環境が破壊された経験を持つニュージーランドでは、この島の特異な自然を保護することに政府が力を入れている。のために、手つかずの自然が残され、人工物が全く見えない原始の風景が広がっている。特に人口の少ない南島にはそのような場所が多い。南島の背梁山脈は、ヨーロッパアルプスと対比されサザンアルプスと呼ばれている。高さは最高でも3700m程度しかないが、緯度が高く海が近いため大きな氷河が形成されており、堂々たる山脈である。

ニュージーランドには2度、妻と訪れている。1度目は2016年の1月、南半球の夏の季節に行ったが天候に恵まれず、目当てのアオラキ峰(3724m; 別名マウントクック)やミルフォードサウンドのマイターピークを見る事ができなかった。しかし、ミルフォードサウンドではタスマン海に面したフィヨルドの荒々しい地形に驚かされ、降雨による一時的な滝が至る所に現れる光景はただならぬものを感じた。そうなるとどうしても雄大な景色を見たくなって、2018年の5月、今度は秋の季節に再訪することとした。

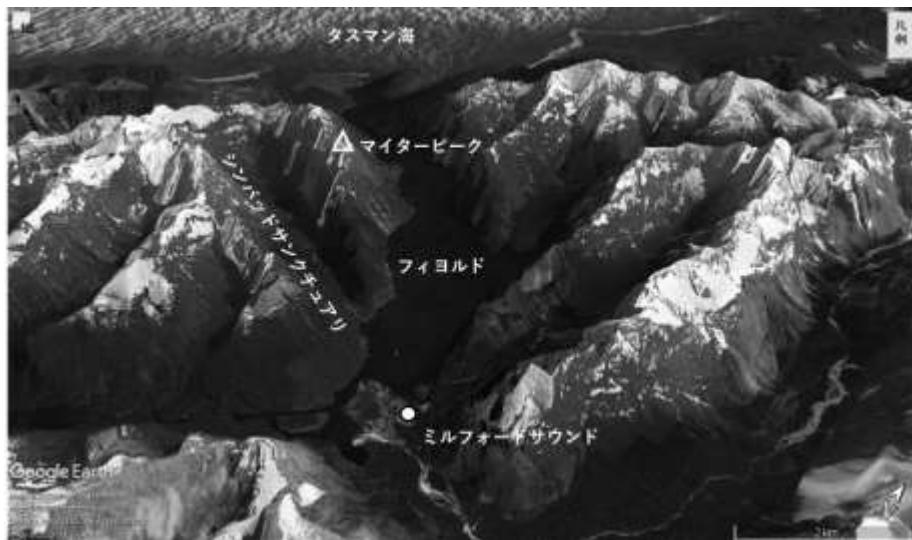
クライストチャーチを午後出発し、夜暗くなってから満天の星空のマウントクック地方に到着した。前回ここでは、雨に降られながらケアポイントまでのトレッキングを行ったが、全くと言っていいほど景色を見る事ができなかった。しかし今回の訪問では幸い天候に恵まれたようだ。夜明け、ハ

ミテージホテルから見るアオラキの頂上部分がオレンジ色に染まる。原住民のマウリ族の言葉で「アオラキ」とは雲を突き抜けるという意味だそうだ。今回はフッカーバレーの氷河湖までトレッキングすることとした。ルートは常にアオラキを見ながらまるで庭園のように美しい場所を歩いていく。氷河湖近くになると先日降った雪が残っていて眩しい。最後のモレーンをひと登りすると氷河湖が現れた。その雄大な景色を堪能して帰途に就く。帰り道に振り返ると、アオラキがその名の通り雲を突き抜けて聳えていた。 ⇒ **pic.36 「雲を突き抜ける峰」**

マウントクック地方からクイーンズタウンへ向かう。プカキ湖の畔に出て振り返ると新雪を被ったアオラキが眩しい。深い青い色をした湖のそば、羊の群れが枯草色の草原を、餌を求めて移動していく。ニュージーランドの秋を代表する景色である。 ⇒ **pic.37 「サザンアルプス」**



クイーンズタウンからミルフォードサウンドを再訪した。元来ミルフォードサウンドというところは天候不順で有名なところらしい。晴れる日は数えるほどだという。今回もだめかもしれないと心配していた。クイーンズタウンから1日ガイドをしてくれる日本人女性も「内陸側で天気が良かったとしても、ホーマートンネルを越えて海側に出ると土砂降りのこともあるんです」と不吉なことを言う。運を天に任せて行くしかないというところだ。ところで、この日本人女性ガイド「アヤコ」さんは、2年前に来た時のガイドさんに似ている。ひょっとしてそうかなと思って聞くと、先方でも妻の顔を覚えていたらしく、同じガイドさんだとわかった。クイーンズタウンには30人くらい日本人ガイドが居るらしく、2回続けて同じ人にあたることはまずないそうだ。アヤコさんも初めて同じお客様にあたったと言っていた。



さて、ホーマートンネルに近づくまでは雲一つない絶好の天気に恵まれて、

これは期待できると思っていた。ところが、トンネルを出て前方を見ると黒い雲が沸いている。フィヨルドに降りていくと雲が広がってきて、期待したマイターピークはなんと雲に隠れて見えないではないか。「アヤコの不吉な予言」が当たったか。ところがクルーズ船に乗ってタスマン海を往復して戻ってくる頃になって幸運にも雲は切れ、お目当てのマイターピークが姿を現した。「マイター」とはカトリックの僧が被るところが付いた帽子のことである。その名の通りの姿で海面から絶壁が1700mの高さでピークまでまっすぐに聳えている。スケールが大きすぎてにわかにピンとこないが、クルーズ船が近くとその大きさに驚く。おそらく海岸岩壁では世界最大ではないか。マイターピークだけではなく、フィヨルドの側壁はいずれも巨大な絶壁となっている。これらは長い時間をかけて氷河が削った地形である。そこにいると地球の持っている巨大な力が感じ取れる。 ⇒ *pic.38 「フィヨルドランド」*

フッカーバレーにて



日本の山々

ヒマラヤやヨーロッパアルプスの山々に比べて我が日本の山々は、大岩壁や氷河の持つ凄みや荒々しさはないが、なんと優しく美しいことであろう。しかも四季によって全く異なる表情を見せる。植生が乏しいヒマラヤやチベットではこれほど劇的な季節の変化はない。せいぜい白く雪で覆われている部分が広がったり狭まったりの変化にすぎない。山々が樹木に覆われているということは素晴らしいことであると思う。

これまで描き貯めた日本の山の風景画から、季節の移ろいに応じてセレクトしてみた。

長野県の松本から信濃大町を経て新潟県の糸魚川までを走る JR 大糸線からの北アルプスの景観はいつ来ても見飽きない。特に常念岳の三角形、鹿島槍ヶ岳の双耳峰、白馬三山の整った美しさなどがすぐに思い浮かべることができるが、山容の立派さという点では、蓮華岳が一番であると思う。特に厳冬期の蓮華岳は素晴らしい。2月初旬だったと記憶しているが、長野県山岳連盟の依頼を受けてロープチン初登頂の講演を信濃大町の山岳博物館でおこなったことがあった。講演の日は大雪であったが翌日は朝から天気が回復した。帰途信濃大町駅まで車で送ってもらって、駅頭で列車の時間を待つ間に立派な蓮華岳を飽かず見ていた。 ⇒ **pic.39 「信濃大町からの蓮華岳」**

春まだ浅い3月、御嶽山山麓開田高原。山はまだ深い冬の眠りの中にあるが、山麓ではやわらかい日差しや雪融けのせせらぎに、春へと確実に季節が進んでいることが感じられる風景である。この御嶽山では、1988年11月に当時神戸大学山岳部チーフリーダーであった天野弘善君が雪洞に埋没して

遭難死した。私は遭難の第1報を受けて捜索のため現地に向かった。現場で彼が埋没していると思われる場所を 1.5m ほど掘ったところ、彼が着ていた赤いヤッケの背中が見えた。もしかして生きているのではないかとの希望は絶たれた。その後彼の遺体をスノーボートで登山口に降ろした。寒々としたお寺のお堂で警察の検死をむなしく見ていたことを今でもはっきりと思い出す。 ⇒ **pic.40 「雪融けのせせらぎ」**

5月初旬、冷たい雨が降った翌朝、上高地から徳本峠に登る。5月の連休の頃は一時的に冬型の気圧配置になって 3 千m の稜線では思わず雪となることがある。こんな時には山は冬に逆戻りする。梓川越しに見た穂高連峰は予想したとおり白く化粧をし直していた。 ⇒ **pic.41 「徳本峠からの穂高連峰」**

5月も中旬になると天候が安定てきて晴天の日が続く。午後になっても雲が湧くことがなく日差しは強烈で、こんな日には一気に雪融けが進む。背後の穂高には残雪がまだまだ豊富であるが、麓の上高地では新緑が一斉に芽吹く。 ⇒ **pic.42 「上高地新緑」**

神戸市のメインストリートであるフラワーロードの市役所前。神戸は大阪湾と六甲山系に挟まれた東西に細長い土地である。ビルのすぐ背後に市章山から摩耶山にかけての山が迫っている。 ⇒ **pic.43 「陽光あふれるフラワーロード」**

6月の水芭蕉が咲く尾瀬ヶ原。誰もが知っている日本の代表的な山岳風景である。一年で最も賑わう季節で、訪れた時も大勢の人が行列をなしていた

が、もちろんそれは描かずに静かな尾瀬を表現した。背後にどっしりと構えた至仏山にはまだらの残雪が残り水芭蕉とともに風景の主役となっている。

⇒ *pic.44 「尾瀬の水芭蕉」*

奥入瀬溪流は日本の渓谷美を代表する風景である。十和田湖から流れ出た清冽な水が深い新緑の森の中を流れている。手が痺れそうに冷たい水を感じられるだろうか。1本のヤシオツツジの花が景色を引き立てている。

⇒ *pic.45 「新緑の奥入瀬」*

日本アルプスの象徴槍ヶ岳に登る一番ポピュラーなコースは上高地からの槍沢である。槍沢ロッジを出発し、赤沢のテント場を抜けて、残雪の消えたガラガラ道を辿ると大曲にでる。道は急になるが、頑張って登るとやがてU字谷の奥に槍の穂先が見えてくる。夏山気分が最高潮になって元気が湧いてくる。 ⇒ *pic.46 「槍沢の夏」*

南部縦走路の途中から見た白山最高峰の御前峰。夏のある日、御前峰から南竜ヶ馬場に下り縦走路を別山に向かう。テント場を抜けていったん下って沢を渡り、油坂と呼ばれる登り坂を辿っていくと見晴らしの良いお花畠に出る。振り返ると先ほど登った御前峰が夏空をバックに高くそびえている。

⇒ *pic.47 「油坂の頭から仰ぐ白山御前峰」*

9月末から10月初旬にかけて3千mの高山は錦繡に包まれる。特に美しいのが、穂高の涸沢と立山の浄土沢であると思う。立山の一の越から浄土沢を下ってくると、植物は赤、黄、オレンジ、黄緑、緑に色分けされ、白っぽい岩肌、青い空と相まって絶妙のバランスの色彩の世界となる。まるで夢の

ようなパラダイスを歩いているようだ。こんな景色は日本以外では世界中どこを探してもないのでなかろうか。 ⇒ *pic.48 「立山・浄土沢の秋」*

秋晴れの朝、JR 大糸線白馬駅から姫川を渡って白馬ハイランドホテルのあたりから白馬三山を見る。白馬村の家々を前景として白馬鑓ヶ岳、杓子岳、白馬岳が並んでいる。主稜線ではすでに新雪が降って白くなっている。中腹はハイマツの緑に加えて、ダケカンバの黄色、ナナカマドなどのオレンジ色に彩られ、手前の小日向山は広葉樹が絶妙な秋色に染まっている。手前の八方尾根のスキー場はあと少しで降り出す雪を待っているようだ。

⇒ *pic.49 「白馬三山の秋」*

立山・室堂へのアルペングルートは11月下旬で閉鎖される。その閉鎖直前に立山から別山へと縦走する。すでに稜線上では冬山の様相であり、いつ大雪が降っても不思議ではない。案の定別山で大雪に捉まり、ラッセルしながら剣御前小屋へ向かって下っていく。すっかり冬の姿になった剣岳が黎明の光を受けて輝き我々を手招いている。 ⇒ *pic.50 「黎明の剣岳」*

夏のシーズンには夥しい数の登山者を迎える富士山。登山道は特に困難なところもなく、空気が薄いため苦しいのを我慢すれば大体は誰でも頂上まで行きつける。しかし、冬富士は全く様相が異なる。森林限界以上ではつるつるの氷の急斜面（アイスバーン）となり、独立峰なので突風が吹きまくっている。少しの油断が命取りになるのである。これほど夏と冬のギャップがある山は珍しい。

2012年12月1日、富士山登頂後下山中に吉田口七合目付近で緒方俊治先輩が滑落して亡くなった。緒方さんは私より7歳上の先輩である。1976年の

カラコルムのシェルピカンリ遠征で井上達男先輩とともに頂上に立った人である。1986年のクーラカンリでは登攀隊長として活躍し成功へと導いた。ヒマラヤ初経験の私たち隊員は緒方さんの指示のとおり動かされていた。それだけ緒方さんを信頼してついて行ったのである。クーラカンリから帰った後も日本の山で何度も一緒に登った。いつも行動食にリンゴを持ってきてみんなに分けてくださった。テントや山小屋では酒の肴のイリコが定番だった。登山の時はいつも冷静沈着で慎重であった。そんな緒方さんが冬富士の七合三勺付近の登山道から吉田大沢のアイスバーンへ滑落してしまった。冬富士はそれまで何度も登っていたのに、魔が差したというのか。

当日、遭難の一報を受けて深夜に緒方夫人とお二人のご子息を車に載せて神戸から富士吉田へ向けて走った。翌早朝、中央自動車道の笹子トンネルを通過した。私たちが通過した15分後に天井板落下事故が発生した。そのことは富士吉田駅に着いた後テレビを見て知った。私たちは緒方さんの御靈が少しの間天井板を支えてくれたのだろうかと話した。

さて、この画は緒方さんの鎮魂の画である。富士吉田に近い忍野からの冬富士である。遭難現場となった吉田大沢は正面に見える窪んだところである。いつも着ていたクーラカンリの時の黄色いヤッケと青いニットの帽子の姿で、忍野の河畔に緒方さんが立っている。 ⇒ *pic.51 「冬富士・忍野」*



2011年12月4日 遭難の1年前の緒方先輩
富士山吉田口六合目付近にて 頭上の白い部分が吉田大沢

あとがき

この本を出版した時点で私は 65 歳となった。いわゆる高齢者の仲間入りをして、年金の支給が始まった。当然、山に行く体力はおちてきている。そのためか、頑張って高い山へ行くよりも、山の油絵を描いているのが楽しくなってきている。自宅の 2 階の部屋で好きな音楽を BGM にして油絵を描いているときは文句なく幸福である。その描いている景色の場所を居ながらにして歩いているようだ。時間がたつも忘れている。そんな時にいつも、妻の照代が「お昼の用意ができたよ」とか「お茶にしますか」と声をかけてくれる。言葉に出さないが妻に感謝し、ほったらかしてヒマラヤに何回も行ってきたことを心で詫びている。

自分の作品集を出版するということは、画でも写真でも俳句でも自分の子供のような作品を多くの人に見てもらいたいと願い、さらに自分が逝ったあとで自分が生きていた証みたいなものを遺したいからであるらしい。そういうことからするとまだ 65 歳なのに少し早すぎるとも思える。これから何年生きられ、何年描き続けられるかわからないが、今よりも自由な時間が増えて、おそらくこれまで描いた以上の枚数を描くだろう。その時は第二集を出せばいいかと考えている。

この画集に載せる画像や解説原稿は約 1 年前から揃え始めた。最近になって新型コロナウイルス緊急事態宣言が出て、世の中大変な試練の真最中ではあるが、皮肉なことに Stay Home と Telework のおかげで絵画制作や原稿づくりが随分とはかどり、出版を数か月早めることができた。思わぬ災いが降りかかるとも、それを転じて福となす、何事も前向きに捉えたいものである。

2020 年 6 月 1 日

著者略歴 山田 健（やまだ たける）

1955 年 3 月	大阪府堺市にて出生
1974 年 4 月	神戸大学工学部土木工学科入学 神戸大学山岳部入部 四季を通じて日本の山に登る
1979 年 4 月	兵庫県庁入庁 神戸大学山岳会員
1981 年 7 ~ 8 月	神戸大学カラコルム追悼隊 遺族付隊員
1986 年 3 ~ 6 月	神戸大学チベット学術登山隊 学術隊員兼登山隊員 クーラカンリ峰初登頂、自身は 7250m 到達
1990 年 ~ 91 年	油絵教室に 1 年間通う
2006 年 4 月	神戸大学山岳会 事務局長
2007 年 10 月 ~ 11 月	神戸大学・中国地質大学合同カンリガルポ偵察隊隊長 アタ氷河にて KG 2 (ロプチン峰) を確認
2009 年 4 月	日本山岳会入会 (関西支部)
2009 年 10 月 ~ 11 月	神戸大学・中国地質大学合同カンリガルポ学術登山隊 日本側副隊長 KG 2 (ロプチン峰) 初登頂
2015 年 3 月	兵庫県庁退職
2015 年 4 月	第一復建株式会社入社
2015 年 10 月 ~ 11 月	神戸大学・中国地質大学合同ニエンチェンタンラ西山群登山隊 日本側登山隊長 バダリ主峰試登
2016 年 4 月	神戸大学山岳会 副会長
2020 年 5 月	神戸大学山岳会 会長